

---

リリカル銀魂 Strikers ~ 銀女神鎮魂歌 ~ ショートストーリー

真王

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉ショートストーリー

### 【Nコード】

N8198W

### 【作者名】

真王

### 【あらすじ】

我がと投稿しているリリカル銀魂 Strikers 〈銀女神鎮魂歌〉のショートストーリー。みたいなら見てくだせえ！

なのは「ライバルだもん」(前書き)

「銀さんは私の物だよ」

なのは「ライバルだもん」

機動六課のお食事タイム、ある時なのはとフェイトに言った。

なのは「フェイトちゃん、この前銀さんに裸見られたとかどうとか  
いったよね？」

フェイト「え？あ、い、言ったよもちろん」

フェイトはいきなりに発言にどきまぎながら答える。

だがななめ45度傾いた質問をしてきた。

なのは「だったら……そのまま銀さんのベットに入っ  
たりしてないかな？」

ブー――――

――――！！！！！！

それを聞いたフェイトはもちろん銀時や他に食事していた方々まで  
吹いた。

銀時「ちよつとおおお！！？？なのはさんんん？？お前なんてこと  
言つてんのおお！？？」

フェイト「なななななななのは！！！！そそそそそそんなこ  
としてしてないから！！！！！！」

銀時は怒鳴り、フェイトは全力で否定した。

なのは「そっか、そうだよね」

なのは笑顔になって銀時とフェイトは安心の息を吐くが、

なのは「なら、今から犯つても遅くはないってことだね!!」

銀時「尚更アウトオオオオオオオオオオ!!!!!!」

もはや取り返しがつかなさそうな状態なのは。

なのは「そんなわけで、銀さん！私が永遠の妻になるから！」

フェイト「なのはあああ!!! 銀時は渡さない!!!」

シグナム「テストロツサ!!! 貴様も抜け駆けは許さんぞ!!!」

アルフ「アタシだって!!!」

リインフォース「銀時は私の物です!!!」

ティアナ「兄さんを汚すなあ!!!」

スバル「銀さんは渡しませんよお!!!」

そう言ってラバーズ達は訓練場で戦争を起こしました。

銀時「なんでこーなるの？」

ネプテューヌ「もてる男の宿命だよ・・・的な」

この後銀時も彼女達のファンクラブの方々（+ビビ）に追われることとなるのは言うまでもない。

なのは「ライバルだもん」(後書き)

感想を待つ。

「ハア」「ハア」「ハア」「ハア」「ハア」……はっ!? イカン! 抑えなきや 押  
えなきや……」

「ハア、ハア、ハア、……はっ!? イカン! 抑えなきや 押  
えなきや……」

「ビビ」なのはちゃんー！」

ネプギアがビビになののについて話している。

ネプギア「ビビさんってなのはさんのことが好きなんですか？」

ビビ「もちろんよ！転生する前から私なのはちゃんだーい好きなんだからー！..」

なのは絡みになると興奮するビビ。

ビビ「でもまあ、なのはちゃんあの言葉も聞きたかったなあ...」

ネプギア「あの言葉？」

ネプギアは首をかしげる。

ビビ「無印なのはちゃんのあるセリフだけだね。まずレイジングハートを回して...」

ビビが木の棒を持って振り回してまるで無印のジュエルシード封印のしぐさをする。

ビビ「リリカル・マジカル・ジュエルシード封印！どうだった？」

ネプギア「どうだったって言われましても...恥ずかしくないんですか？」

ネプギアは少々引いている。

ビビ「全然！寧ろなのはちゃんになりきった感じ！無印なのはちゃんはこんなポーズしてとっても可愛いんだからー！..」



ビビは目を輝かせている。

ビビ「さあネプギアちゃん！一緒にリリカルマジかるやろっよ！答えは聞いてない。リリカルマジカル？」

ネプギア「リ、リリカルマジカル・・・」

ノリノリのビビにどきまぎのネプギア。

ネプギア「やっぱり恥ずかしいよこれ・・・！」

その近くの木陰

なのは「ビビちゃん？ネプギアちゃんも一緒に頭ひやそっか？」

笑ってない笑顔で木をメシメシと握りながら黒いオーラを纏っているのが見えていました。

「へ」「なのはずか〜ん!」（後書き）

19歳じゃ恥ずかしいものだらうね…

シグナム「戦闘なう」(前書き)

「私は常に戦い続けるのみ」

シグナム「戦闘なう」

カキイン！カキイン！

訓練場でシグナムとエリオが稽古している。

シグナム「甘い！」

エリオ「うわ！」

エリオは一本取られる。

シグナム「ここまでだ。出直せ」

エリオ「うう・・・でもまだ負けませんよ！」

エリオは負けない闘志を燃やしている。

シグナム「フ、その意気込みを忘れるな」

エリオ「ハイ！」

エリオは訓練場を後にした。

すれ違いにレオンがやってくる。

レオン「性が出るな。シグナム」

シグナム「レオンか」

シグナムはレオンが持ってきた水を飲む。

レオン「私にもエリオのようなああいうちゃんちゃん感じに奴らを弟子にしてたことがあったな」

シグナム「エリオと私は師弟ではない。だがレオンが弟子を持つてたことに興味があるな」

レオン「ああ、私によく負けた後『いつかレオン師匠を超えてみせる！』とかよくいってたな。今は山の中で武者修行をしているらしいがな」

シグナム「ふ、似ているな、それは」

レオンとシグナムは笑う。

レオン「それはそれとして、始めるか！」

シグナム「そうこなくてはな！」

レオンとシグナムの戦闘が勃発した。

やっぱり似た者同士であった。

アイエフ「メアド決めなきや」(前書き)

「やっぱケータイはいいわね」

アイエフ「メアド決めなきゃ」

ピッ、ピッピッ

アイエフがケータイをいじっている。

アイエフ「ん〜、だんだんマスターしてきたわ」

アイエフはパクロスをやっていた。

コンパ「アイちゃん、いい加減ケータイを使いすぎです」

アイエフ「あ〜、待って待って、切りのいいところで止めるからなのは「でもそう言って止めなかったのどこのどいつかなあ？」

フェイト「それに子供がそれを使っちゃだめだよ」  
ネプテューヌ「イヤあ、アイちゃん3年前からも使ってたみたいだよ」

レーティア「そうなの？」

銀時「んなこたあいいがさっさと終われよ」

銀時がケータイを取り上げようとする。

アイエフ「ちょっとはなしなさいよ」

銀時「いいからやめろ」

アイエフともみくちやしているど、

パキヤッ

銀時、アイエフ「あ」

全員「あ」

アイエフのケータイは銀時がふんずけてしまった。

アイエフ「あああ・・・私のケータイがあ・・・」

なのは「銀さん・・・」

フェイト「銀時・・・」

銀時「え？ちよ、止めて、その目で見ないで」

シヨックを受けるアイエフに全員が銀時を睨む。  
すると、

アイエフ「うりゅ・・・」

アイエフが涙目になった。

フェイト「あ、アイエフ？どうしたの？」

アイエフ「私、ケータイが無いと・・・」

コンパ「すいません、アイちゃんケータイが壊れるとこんな感じになっちゃいます・・・」

どうやらコンパはアイエフの豹変を知っているらしい。

なのは「だ、大丈夫アイエフちゃん・・・」

アイエフ「うん、ありがとなのはちゃん・・・」

全員（コンパ除く）「ちゃん!？」

アイエフらしからぬちゃん付け。

確かに変になってる。



コンパ「ほら、お手手つないであげるですから付いてくるです」「  
アイエフ「うん……」

幼児退行したアイエフはコンパと手をつないで一緒に歩く。  
とつてもシユールだ。

全員啞然とし、

ネプテューヌ「アイちゃん、あんな一面あつたんだ……」

銀時「なんか……すっげ〜悪いことしたな……」

ジャンヌ「で、でもでも、あのアイちゃん見て胸キュンしちゃった」  
なのは「た、確かに」

はやて「否定できひんな……」

ビビ「ギャップ萌えエエ……（\*´、´）」「

レーティア「ちよつともつたいないわね……」

ギルシア「ギャップ萌え最高!!」

アリア「あります!」

ムツリ「……」

アイエフの意外すぎる一面を見た一同であつた。

アイエフ「メアド決めなきゃ」(後書き)

アイエフはケータイが無いと幼稚になっちゃうんです

ジャンヌ「夏ですから」(前書き)

「夏と言えばかき氷や夏祭りやスイカ……そして海！最高だわ……」

ジャンヌ「夏ですから」

ミッドチルダは夏真っ盛り。

ジャンヌ「ねえみんな。今度海行く時のために水着買おつか」

はやて「水着か。そりゃ大賛成や。たわわと揺れるあれも拝まん  
と…」

なのは「はやてちゃん？」

はやて「うそうそ、なのはちゃん冗談やから…」

女性陣は水着の話で持ちきりだ。

ネプギア「水着ですか」

ネプテューヌ「それならちようど良かった！是非試してみたかった  
ものがあるんだよね」

はやて「なんや？もったいぶらず言つて見い」

ネプテューヌ「フッフ、見て驚け！これだよ！」

ネプテューヌが取り出したのは紫色のビギニ。

・・・だがネプテューヌの体ではあわない。

なのは「・・・ネプちゃんどういうこと？」

ネプテューヌ「だから最後まで聞いてって。変身」

ネプテューヌは女神化した。

先ほど持っていた紫ビギニを着て。

パープルハート「どうかしら？」

ノワール「ま、まさかそのパターンでいくなんて…」

フェイト「凄い発想だね」

ジャンヌ「グラビアアイドル狙えるかも？」

レーティア「それじゃあ各自水着を用意しましょう？」

というわけで女性陣は水着を買いに行った。

ヤルオ「・・・これはいいこと聞いた。女だけ楽しむのは駄目だよ。僕等もいくんだからな」

影でヤルオが盗み聞きしていたのは言うまでもない。

その後はやてとか貧乳組みが暴走していたことは追加しておく。

ジャンヌ「夏ですから」(後書き)

海はいいな。

コンパ「みなさん」(前書き)

「ご飯の時間ですよ」

コンパ「みなさん」

### 機動六課食堂

コンパ「皆さん、今日は私が精神込めて作った弁当があります」  
ネプテューヌ「おお〜！コンパのお料理久しぶりだよ〜！」

コンパが手づくり弁当を持ってきてネプテューヌらは嬉しそうだ。

なのは「あ、コンパちゃん料理で来たんだ」

コンパ「看護師として当然のことをしたまです。エッヘン」

胸を張るコンパ。

技術が低いのが玉にキズ。

アイエフ「まあパーティだった時はコンパが料理担当だったしね」

ネプテューヌ「こっぴどく見えて料理経験ないしね！」

アイエフ「余計なこと言わないの」

コンパ以外は料理経験ゼロのようだ。

銀時「でだ。どんな料理なんだろうな」

コンパ「試食してみます」

コンパの仰ぎに銀時は試食。  
すると、

銀時「お、マジでうめえ！」

新八「ホントだ！」



神楽「うおお！！コンパマジ天使アル！」  
はやて「うちに引けを取らんな…」

ほとんどコンパの料理は高評価だ。

フェイト「うん、コンパがいつかいいお嫁さんになるかも」

アイエフ「（ピクツ）」

ジャンヌ「いいね！私なら貰おうっかな？」

ビビ「私もいいかも（\* \*）」

アイエフ「（ピクピクツ）」

いきなりコンパを嫁にしようか宣言が聞こえる。

ギルシア「じゃあいだとつて俺様が…」

アイエフ「いい加減にしなさいよあんたら！！コンパはあたしの嫁  
よ！！！」

全員「……………」

アイエフ「……………あ」

ギルシアが言いかけたところアイエフが自爆発言投下。

コンパ「あいちゃんったら／／／／／」

コンパは顔を赤くする。

ネプテューヌ「アイちゃんヒューヒュー」

銀時「お前そんな趣味があったのか」

アイエフ「ち、ちが、そんなじゃないのよ！！！」

レーティア「分かってるわ。あなたはいいゆり関係を築けるって」

ビビ「羨ましいよコンチクセウ！」

アイエフ「分かってないイイイイイい！……！……！誤解よそれはア  
アアアアああ……！」

そしてこの後もアイエフはそのネタでコツテリ絞られた。

コンパ「みなぎくん」(後書き)

そんなパターンもある。

「ビ」「ネプギア・・・」(前書き)

「なんて恐ろしい子...!」

「ビビ」「ネプギア……」

ビビ「ハア……」

ビビがなぜか疲れた顔をして溜息を吐く。

ネプテューヌ「あれ？ビビちゃんどうしたの？」

そこへネプテューヌが声をかける。

ビビ「ああ、ネプテューヌちゃん。聞いてよ、ネプギアちゃんが……」  
ネプギア「リリカル・マジカル、魔法少女リリカルネプギア、ここに参上です！」

ビビが言おうとしたら無印なのはバリアジャケットを着てレイジングハート（本物）をくるくる振り回しているネプギアが現れた。

ネプテューヌ「………ビビちゃん？これどういうこと？」

ビビ「いやあのね、一緒に無印なのはちゃんの踊りやろっつていつも隠れてやってたらネプギアちゃんすっごいハマっちゃってすっごい完成度もっちゃって……何か負けた気がして……」

ビビはあまりのネプギアの踊りの完成の良さに落胆した。

ネプテューヌは頭を抱える。

ネプテューヌ「なんてことしてくれるのよ。ネプギアはハマったらノリ良くなっちゃうんだよ」

実際ボールがネプギアにあるゲームをやらせてそのゲームにはまっ  
てしまったことがある。

ネプギア「これが私の全力全開！スターライトお……」

ネプテューヌ「は！？ネプギア！それ以上はダメえええ……！」

ネプギア「ブレイカー……！！！！！」

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアン……！！

ピンクのキノコ雲ができました。

ビビ「ネプギア……恐ろしい子……」

ネプテューヌ「回復アイテム……キボンヌ……」

ネプギア「リリカル・マジカル……」

巻き込まれたビビとネプテューヌは気絶し、ネプギアは無傷でスキ  
ップしました。

余談であるが、なのはは、

なのは「ここから出してなのおお……！！！！！」

ハマったネプギアの作ったケージで閉じ込められていました。  
数時間後銀時が発見された。

ネプギア、ある意味恐ろしい存在である。

ビビ「ネプギア・・・」(後書き)

ちなみにベールがやってたのは男が裸のゲーム。

それゆえネプギアは裸をハマってしまったことがあります。(ゲー

ム経験談)

「プリア」プリアです」「(前書き)

「現在プリニーの指導係としています」



プリア「プリアです」

銀時「お〜い、パフェ持ってきてくれないか？」

プリア「チョコパフェ持ってきました」

銀時「お、サンキューな」

銀時がプリアからパフェを買った。

ティアナ「ん〜、このペースだと間に合いすぎね…」  
プリア「すいませ〜ん、はやてさんから追加の書類です」  
ティアナ「あ、そこに置いといて、ちょうどもう仕事欲しかったのよ」

ティアナの隣にプリアは書類を置く。

桂「・・・無償にのりそばが食べたくなってきた」

プリア「桂さん、のりそばありますけどあげますよ？」

桂「おお、かたじけないプリアどの！」

桂はプリアを感謝した。

レーティア「ああ、買い物に行くのを忘れてたわ…」

プリア「それでしたら、僕が買ってあげましたよ。それからリルち

やん用のおむつも」  
レーティア「あら、気が聞くのね」

そんなある日

銀時「ところでようプリア、お前未来予知的なもん持ってるか？」  
プリア「そんな大それたものは持ってませんよ。ただ次にすべきことをしなければならぬだけです」

なのは「いやいやそうじゃないよ。人が困ってるときにひよこつと現れてすぐに解消してくれることに驚いてるんだよ」

プリア「前もって事前に用意しないとイケない癖でしてね」

銀時「お前：少しプリーっばいぞ」

プリア「確かに、僕はプリーニーの特性を色濃く残ったのかもしれない。どうなるにしろ、これが今の僕ですから」

銀時、なのは「……」

プリア「おっと、はやてさんが仕事疲れでジュース飲みたがってる気がする。買ってこよう」

そう言っつてプリアはジュース買うために走り去っていった。

なのは「頑張ってるんだね」

銀時「あいつを悪用する人がいなければいいがな……」

その後もプリアは何時も通りやっていた。  
だがプリーニーと同じくパシリということになる。

プリア「プリアです」(後書き)

ある意味特殊能力だろうね。

神「たこ焼きや！」（前書き）

「ワイは絶対に伝説のたこ焼きを作るで!!」

神「たこ焼きや！」

ネプギア「 그레이さんから聞きましたけど、たこ焼きが好きなんですか？」

神「おうよ。俺様はたこ焼きが大好きだ」

ネプギアと神はたこ焼き談義をしている。

神「しかもワイはな！食べるのも好きだが作るほうが好きなんや！じゅーじゅ 焼くあの音とあの触感を作り出す感覚がとっても好きなんや！」

ネプギア「そ、そうですか」

人が変わったかのようなしやべり方をする神にネプギアは少し引く。

神「それにな、ワイは何時か究極のたこ焼きを作るのが目標なんや。いつちよ目指したるでー！！」

背景に波しぶきを出して叫ぶ神。

ネプギア「あはは・・・、ところで思ったんですけどもし神様じゃなくなったらどうしてたんですか？」

神「俺様が神じゃなかったら？そうだな・・・出来る事と言えばたこ焼き屋を営んでいたな。愛する妻もな」

ネプギア「たしかに、神を取ったらただにたこ焼き屋さんですね」

神「さり気無くムカつく気がするが・・・」

神はジト眼でにらむ。

神「そう言うお前は女神取ったらどんなことやってたよ？」  
ネプギア「え？」

ネプギアは返事に困った。

女神ではなくなった自分。

ただの人間となった自分はどんなことをやっているのか。

ネプギア「・・・分かりません・・・」

神「そうかい、なら将来のこと考えておくんだな」

神はそう言って去っていった。

ネプギア（女神じゃなくて人間の私達：もし異世界にいる英雄達や伝説の方々も普通の人としてならどんなことをやってたんだろっ？  
・そして私達は人間だったら一体どんなことをやってたんだろっ？  
）

ネプギアは疑問に思いながら六課へ戻った。

神「たご焼きや!」(後書き)

どうなるだろうね。

井戸子さん「ビデオ……」(前書き)

「しあわせ……ほし……」



井戸子さん「…ビデオ…」

ネプテューヌ「たっだいま」

銀時「遅かったなおい」

ネプギア「いえ、ちよつとした事がありました」

ネプ姉妹が買い物から帰ってきた。

手には買い物した商品と……一本のビデオ。

銀時「なんだそれ？」

ネプテューヌ「これ？髪の長い女の人私たちのファンだつて言つて渡してくれたんだ」

ネプギア「あの人いわく『幸せのビデオ』つていうんです」

姉妹はニコニコしながら言う。

するとビビが一つの質問を投げた。

ビビ「ね、ねえ2人とも。その女の人つてどんな人？」

ネプギア「黒いロングヘアに白ワンピースを着た人です。でも髪が長すぎて顔がよく見えなかつたですけど……」

ビビはそれを聞いた瞬間少し顔を青くした。

ネプテューヌ「じゃあ私たちがちよつと整理してくるから」

ネプ姉妹はどつかへ去った。

ビビは頭を抱える。

ビビ「ぬがああああ！！まさか本当に実在したなんてえええ！！」

銀時「え？なに？なにがなの？」

銀時は付いていけてない。

ビビ「あのビデオのことよ！私暇つぶしで図書館行ったんだけどそのなかで幸せの井戸子さんってタイトルの本があったの。そのビデオを見たものは7日後に幸せが訪れるって」

銀時「なんだよ言いもんじゃねえか」

銀時は軽く言うがビビは否定。

ビビ「よくないわよ！！あのタイトルの本当の呼び名は死を合わせると書いて死合わせの井戸子さんなのよ！！そして2人があったあの顔が隠れた髪の女は井戸子さんなのよ！！」

銀時「マジでかああああああ！！！！」

ビビ「ネプギアちゃああああああん！！早まらないでええええええええ！！！！」

銀時「待つてろよネプテューヌーーーー！！！！」

2人は全力で阻止に入った。

後日、ネプテューヌとネプギアはそのビデオを見ておらず、はやて、桂が興味本位でそのビデオを見て7日後に惨劇ができたの言うまでもない。

井戸子さん」「…ビデオ…」（後書き）

元ネタ

井戸子…まんま貞子です

死合わせのビデオ…呪いのビデオ…こちらもリンググネタ

レーティア「ギルシア〜?」(前書き)

「誰にもこの愛と絆は壊させはしないわ」

レーティア「ギルシア？」

六課の食堂にて

レーティア「ギルシア、そんなに急いで食べないの」

ギルシア「いやなに、レーティアの手料理を思うと無性に食べたくなっただけだ」

レーテョア「あら嬉しい。じゃあ愛弁当持ってて正解だったわ」  
全員（持ってきたんかい！！！！）

レーティアとギルシアが互い向かいあって食事している。

ちなみに女性人男性人は2人を監視しながら食べている。

ギルシアは弁当を開けた。

ギルシア「お？日本弁当（ご飯の真ん中に梅干しを入れたあれ）をハート型にしておかず付きか」

レーティア「だって、梅干しにしようかと思ったんだけどギルシアの愛が伝わらない気がしてタラコでハートを作ったんだもん」

頬を赤く染めてもじもじするレーティア。

それで萌えたと言う男がいたとか。

取りあえずギルシアが一口。

ギルシア「む？この塩味と食感！行けるぜ！！」

レーティア「ほんと！？良かった！貴方のために愛を注いだのが大正解みたい！！」

レーティアは抱きつく。

嫉妬の邪念がどんどん増していく。

レーティア「ギルシア・・・」  
ギルシア「レーティア・・・」

（以下繰り返し）

その時2人の空間からピンク色のオーラが現れ、範囲内にいる方々は苦しんでいる。

銀時「ぐおおおおおおおおお！なんじゃこりゃああああ  
！！！！」

土方「か、体が、おされていくうううう！！」

ビビ「ぐあ、胸が苦しい・・・」

グレイ「・・・（手に血が出るほど握りしめている）」

ジャンヌ「こ、これは超愛フィールド！愛パワーが一定以上達すると発生する邪念を追い払う特殊なパワー！」

新八「すでに彼ら以外吹き飛ばされてるんですけどおおお！！！！」

ギルシアとレーティア以外どんどん離れていく。

リル「あう〜」

娘を除けば。

レーティア「あ〜、よしよし。一緒にいい家族をつくりましょうね  
〜」  
ジャンヌ「愛の力は計り知れないものね」

愛とは恐ろしかったりすごかったりと無限であったりするのだった。

ただ銀時はそれをこなすのは長くなるだろう。

レーティア「ギルシア〜？」（後書き）

愛ってすごいものだと思いますよ！BYフロン

アリサ「まったく・・・」(前書き)

「あたしがしっかりしないとね」



アリサ「まったく・・・」

地球・アリサのコテージ

ネプギアとアリサとさすがが会話している。  
ちなみに彼女は興味本位でここに来ただけ。

ネプギア「アリサさんもさすがさんもお金持ちなんですか？」

アリサ「まあね、あたしこつみてもパーフェクトファンリガルだも  
ん」  
「さすが「私の場合はなんやかんやてきな・・・」

アリサは自慢げに、さすがは困った顔している。

ネプギア「そうですか。ベールさんといい勝負かもしれないね」

思わずつぶやいたネプギアの一言にアリサは突っかかる。

アリサ「ちょっと待ちなさい、いいとこ勝負ってどういうこと？」  
ネプギア「い、いえ！ただベールさんもお金持ちみたいで良く部屋  
に高額な絵とかゲームを置いてたりしてるんです！」

ネプギアは慌てて弁解。

アリサ「高価な絵にゲーム？」

ネプギア「金色のがく淵付きの絵にゲームがたくさんあるんです。  
でもベールさん曰く「この部屋で5%程度ですわ」っていてました」  
アリサ「どんな部屋よそれ！！」

アリサはシャウトする。

ネプギア「それに柄が500枚でゲームが全種で1000以上あるってベールさん言っていました」

すずか「…言葉が出ないくらいすごいんだね…」

すずかは本当に反応に困った。

アリサ「どういう御令嬢さんか知らないけど、お金を自分の娯楽のために使うのはもってのほか！そうよねすずか！」

すずか「え？あ、うん」

アリサ「なら話は早いわ。私そいつに説教してくる！」

アリサはダツシュでベールに会いに行った。

すずか（い、いえない。お金で猫をもっと買おうだなんて言えないよ…。可愛いし）

すずかはそんなことで思い悩むのであった。

余談だが、ベールはアリサに注されたにもかかわらず全然反省していなかったらしい。

ベール「（ベールにとって）三種の神器を止めるのはありえないですわ」

何とも強情な人であった。

アリサ「まったく・・・」(後書き)

アリサとシャルマルは髪の毛的に似てると思っス。

「ヴィヴィオ」よし！」(前書き)

「私も強くなるよ」

「ヴィヴィオ「よし！」」

ヴィヴィオ「ネプ姉ちゃん！面白い本を見つけたんだけど！」

ネプテューヌ「面白い本？どんな？」

ヴィヴィオ「ある魔法少女が宇宙を救ったって話」

ヴィヴィオが一つの本を持って語る。

ヴィヴィオ「その昔ある一人の少女がいました。その少女は普通の中学生でみんなと仲良く暮らしていました。すると白い生き物が現れて『僕と契約して魔法少女になってよ』といいました。けど別世界から来たある少女が契約するなど忠告。ですが少女は世界を守るために魔法少女となって魔女を倒し、自分の実を犠牲にして魔女を全て根絶やしにしました。だって」

ネプテューヌ「ふん」

ネプテューヌは興味ありそうな顔をしている。

ネプテューヌ「じゃあヴィヴィオはその子の名前分かる？」

ヴィヴィオ「そのこは・・・」

とある世界

????「ホーリーアロー!!!」

モンスター「グゴオオオオオ!!!」

ピンクのツインテにいかにも魔法少女っぽい少女がモンスターと対峙していた。  
そして撃退。

「……世界に混沌が浸食している…早く何とかしないと…」

少女は弓を握りしめて思いを溜めていた。

「……ほむらちゃん」

ヴィヴィオ「よし！」（後書き）

元ネタ

白い生き物：QBである。セリフも。

別世界のある少女：彼女の友達の時使いだと。名前はほむら

????：分かる人には分かるはず

岩沢「音楽なう」(前書き)

「・・・いい音色だ」



岩沢「音楽なう」

ネプギア「へへ、そういうことだったんですか」

岩沢「ああ、私にとって音楽はすくいだと思ってるんだ」

ネプギアと岩沢は音楽のことで話し合っている。

岩沢「そうだネプギア。一緒にガルデモやらないか？」

ネプギア「え？い、いいですよ。わたしなんて・・・」

岩沢「遠慮するな。加わればまたいい人気が出るかもしれないし」

ちよっぴり強引な岩沢。

岩沢「さあネプギア！ハンドを始めよう！」

ネプギア「決定事項なんですかああ！！」

数時間後：

ネプギア「いえ〜い！みんなのってるか〜い？」

完全にノリノリなネプギア。

手にはエレキギター。

岩沢「やるじゃないかネプギア！あたしも負けてられないな！」

岩沢も闘心に火がついた。

後ろの4人は啞然としていた。

ひさ子「あいつ、結構乗りいいな……」

入江「ノリがいいとはまっちゃんだ……」

関根「あそこまで豹変してるね……」

ユイ「ぬぐぐ……岩沢さん……」

そうこうしていると、

ネプギア「あ、思い出したことがありました」

ピタッと止めるネプギア。

ネプギア「実は私達の世界で音楽で人を救おうとしている人がいるんです」

岩沢「お？それはいいことだ。だれなんだ？」

ネプギア「5pb.さん、アイドルだそうです」

岩沢達はおお〜という。

ネプギア「ただ、あの性格が問題ですけど……」

岩沢「あの性格？」

ネプギア「5pb.さん、ああ見えて極度の人見知りだそうです」  
ガルデモ「……………」

ネプギアの発言に沈黙する。

岩沢「は？人見知りか？」

ネプギア「ハイ…、初めて会ったときに避けられたことがありまして…」

ネプギアは思い出して暗くなった。

ひさ子「人見知り激しくて何でアイドル？」

ネプギア「スイッチが入っちゃうと紛らわせるそうで、でもプライベートは駄目だそうです」

入江「な、難儀ですね…」

ユイ「アホですね」

## ゲーム業界

5pb・クシユン！今誰かが僕の噂をした様な…」

と鼻をすするのだった。

岩沢「音楽なう」(後書き)

世の中そんな人もいる。

面白武器商人「安いよ」(前書き)

「俺の商品はいいぜ」

## 面白武器商人「安いよ」

武器商人「ようようそこのお譲さんとお兄さん達」  
ネプギア「へ？私達ですか？」

商人に呼びとめられるネプテューヌら女神組と銀時ら万事屋組。

武器商人「あつしは宇宙を旅する商人でさア。異世界からかき集めた武器を買ってみてはいかがかな？見てるだけでもいいがな」  
神楽「変わったもんがいっぱいあるアルな」

神楽が商品を見ている。

ちなみに商品は以下の通りだ。

オンボロソード：ただの錆着いた剣。それだけ。

グギユの杖：この馬鹿犬と言わないで！

マスケットガン：おもちゃと舐めてたら痛い目に会いますわ

恐竜の舌：実は2メートルも伸びるかもしれないもの。

星の杖：だからって願いがかなうわけがありません

マジックジェム：これを持って魔法少女に…なれるか！

魔王少女の服：魔王じゃないもん！つと声が聞こえた気がする。

大泥棒の銃：あの男の所持していた銃です。

ビームブレード：シュン、って言ったら光線剣が出ます

亀王の甲羅：ふんだらいやよ

裏ムエタイのハチマキ：ヤア！アパチャイだよ！

ビッチガン：ビッチな女の下心…。

兄の赤帽子：かぶると勇気100倍に！

弟の緑帽子：かぶると目立ちにくくなるそうです

墮天使の刀：とある墮天使が持つとされる長刀。

ネプテューヌ「すごそう…でも見てるだけでいいや」  
武器商人「あっそ」

そして一通り見た後帰りました。

面白武器商人「安いよ」（後書き）

元ネタ

グギユの杖（ゼロ魔）：ツンデレ魔法使いさんのです。

マスケットガン（まどマギ）：あのやられキャラの愛用銃です。

恐竜の舌（ヨッシー）：やっぱりこいつでしょ

星の杖（マリオストーリー）：レプリカです。ありがとうございます  
しました

マジックジェム（まどマギ）：魔法少女の魂が宿っています。

魔王少女の服（リリカルなのは）：分かる人には分かるあの服

大泥棒の銃（ルパン）：伝説の大泥棒ですよ

ビームブレード（スターウォーズ）：良くある武器です。

亀王の甲羅（マリオ）：宿命のライバルさんです

裏ムエタイのハチマキ（ケンイチ）：危ない男のハチマキです

ビッチガン（パンスト）：パンツが銃に…

兄の赤帽子（マリオ）：お馴染みのあの帽子



弟の緑帽子（マリオ）：「兄さんだけずるいや」

堕天使の刀（FF7）：セフィロスの愛剣

ラム「えへへ」「ロム」・・・」(前書き)

「みんなもたっち」

「たっち...」

ラム「えへへ」「ロム」・・・」

六課にロムとラムの保護者ミナが来ている。

ミナ「ご無沙汰していますみなさん」

ネプギア「ミナさん、どうしてここに？」

ミナ「すみません、保護者としてあの子たちが心配で・・・」

はやて「大丈夫やて、あの子ら元気にやってるよ」

ミナ「いえそうではなくて・・・」

皆はちらつと2人を見る。

ブラン「テメエら・・・！人の顔に落書きしてんじゃねえエエ！！！！」

銀時「あああああ！！俺のジャンプが全身真っ黒にいい！！」

新八「ぎゃあああ！！お通ちゃんが全身真っ黒クロスケに！！」

ジャンヌ「コスプレ衣装が！」

ギルシア「目の前が真っ暗だ！！」

ラム「わっい、みんな面白〜い」

ロム「・・・面白い・・・」

早速被害にあっている面々といたずらした2人。

ミナ「ああいうありさまで・・・」

はやて「ああ、そう言うこと・・・」

はやては冷や汗をかいた。

なのは「2人とも、悪戯してないで勉強したら？」

するとなのはが2人にいった。

ラム「やだ。面白くないし」

ロム「やだ…」

2人は否定。

ガシッ

するとなのはが2人の頭を掴んで

なのは「O H A N A S H Iしろうか」

と黒い笑顔を出して2人を引きずっていった。

ラム「にぎやあああああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ……!!!」

ロム「……うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ……!!」

その後2人の悲鳴が響き渡った。

ミナ「す、すすすみません。か、彼女なんですか？」

顔真っ青のミナがいう。

ネプギア「ヴィヴィオの保護者さんです……。でも怒らせると魔王でも怖いです……」

ネプギアも真っ青で答える。

後日、2人は絶対になのはに逆らわないことを誓ったそうだ。  
トラウマを魂深く刻まれて。

ラム「えへへ」ロム「・・・」(後書き)

親強しです。

キラーマシン」・・・」(前書き)

「ワタシハメイレイニシタガウダケ・・・」

キラーマシン「……」

ネプギア「きゃあ！」

ネプテューヌ「ネプギア！」

ネプギアが何者かに吹っ飛ばされた。

そいつは空中に浮き、灰色の体に赤いライン線のある機械兵器・キラーマシンである。

ラム「おかしいわよ！なんでルウィーで封印されたやるがこんなところに現れるわけ！！？」

ラムの言うには昔犯罪神マジエコンヌが作ったとされる大量殺戮兵器キラーマシン。数は数百以上はあると言われている。現在ルウィーのゲームキャラが封印してあるはそのうちの一体がここにいるのだ。

銀時「どつちにしろ倒さなきゃ意味ねーだろ！！！」

なのは「銀さん！私達も援護するよ！」

銀時が駆け出してなのは達も援護する。

キラーマシンは目を光らせ、右手の斧を振り下ろそうとして神楽がキックではじかれる。

神楽「ミッドチルダの女王神楽様が相手ネ！！！」

キラーマシンは負けじとモーニングスターで攻撃する。



なのは「今だ！ダイバインバズーカ！！」

なのはは隙をついてモーニングスターを破壊した。

ネプテューヌ「トドメは…」

ネプギア「私達です！」

銀時「いくぜ！」

ネプ姉妹と銀時が駆け出す。

銀時・ネプ姉妹「でやああああああ！！！！」

3人はキラーマシンを真つ二つに切った。

キラーマシンは機能を停止した。

ノワール「倒せたわね」

ベール「でもどうしてこんなものが…」

神楽「きつとはぐれもんアル」

新八「神楽ちゃん、野生動物じゃないから」

神楽の言い分に新八が突っ込む。

神楽「何言ってるアル。機械も野生になるね。だからお前は駄眼鏡

アルよ」

新八「んだとおおおお！！」

新八が切れた。

銀時「いや神楽の言葉も一理ある。なんせキラーマシンだからな」

そう言って想像したのはドラクエの奴らだった。

新八「なんでだよオオお!!」

新八のツツコミがこまりました。

キラーマシン」「・・・」(後書き)

機械って野生になるんですね。

シナ「良い景気じゃ」「(前書き)

「たのしいな」

シナ「良い景気じゃ」

シナ「よ！ただいまなのじゃ」

動物達「お帰り園長！」

シナが巨大な袋を持って帰ってきた。

ネプギア「園長…また変なもの拾ってきましたね？」

シナ「変なものとは失敬だな？」

シナは出かける際面白いものを拾ってくるのが多い。

ネプギア「で？今回何拾ったって言うんですか？」

シナ「こいつじゃ」

????「きゃ！」

シナが袋を開けると人が出てきた。

いやその人は体がでかい。

しかも下半身がインクの鱗を持つ魚だ。

????「な、なんですかここは!？」

シナ「ここは王魔時動物園」なに考えてるんですかアアアアア  
!?!?!」

シナが言い切る前にネプギアがドロップキックを喰らわす。

シナ「なにをする」

ネプギア「なにをするじゃないですよ!?!?!なに思いつきり誘拐み  
たいなことしてるんですか!?!」

シナ「いやなに、近くの海岸で寝ていたこいつを連れてきただけだ」  
「????」「・・・」

ネプギアはシナが誘拐したんだと怒る。

シナは弁解をするとき巨大人魚は恥ずかしさで顔を赤くする。

ネプギア「ハア・・・あの、お名前はなんて言っんですか？」

しらほし「あ、私しらほしっています。巨人と人魚のハーフなんです」

巨大人魚・しらほしは言う。

桃色の髪を結び、半透明の羽衣をつけて幼さを残す顔立ちでそれ故人魚だ。

「????」うおおおおおおおおおおおおおおおお!!」

空から男の声が聞こえる。

「????」着地！」

その男は見事に着地した。

「????」よっしゃ！このままなのはちゃんのところまで飛んでいくか！」

男はワクワクした顔でいう。

登場早々なのはちゃんといったことはまず転生者で間違いない。しかもハーレム主義者。

ネプギア「あ、あなたは誰ですか？」

転生者「あ？人にものを聞くときは自分からの…！！？？」

転生者はふりかえっていく際突然の登場に涙目になっているしらほしと眼があった。

転生者は心を奪われた。

転生者「うおおおおお！！俺はあなたに惚れました！！付き合ってください！！！」

なのは達のハーレムそっちのけでしらほしに告白。

しらほし「すいません。タイプじゃないんです」

ネプギア（そう言う問題！！？）

しらほしの純粋な答えにネプギアは驚く。

ガーーーーー！！！！

転生者はショックを受け、石が砕けたかのように崩れた。

転生者「はは・・・振られた…我が人生始めて振られた…」

そしてネガティブになった転生者はとぼとぼどっかへ去った。

ハーレムは諦めて。

シナ「ワハハハハハ！実に面白い！しらほし！面白ことやるうぜー！」  
しらほし「はい！（ニコニコ）」

ネプギア（大丈夫かなこの動物園…）

ネプギアは純粋なしらほしを姉と重ねているのだった。

あと他にもハーレム希望者が出たが、しらほしが断ってみんなハーレムを諦めたと言う。



シナ「良い景気じゃ」(後書き)

天然なのか純粹なのか？

桃子」「しぶぶ・・・」(前書き)

「面白いことになるとついちょっとかい出したくなっちゃうのよ……」

桃子「うふふ・・・」

地球・海鳴市・翠屋

ネプテューヌ「うん、このケーキ最高!」

桃子「あら、それは良かったわ」

ネプテューヌがケーキを食べ、桃子は嬉しそうにする。  
すると桃子はネプテューヌに聞いた。

桃子「で、ネプテューヌちゃん。最近彼氏で来たって聞いたけど・・・」  
ネプテューヌ「え?・・・うん／＼／＼」

ネプテューヌは彼氏という単語に顔を赤くする。

桃子「その反応…まさかいるのね!誰なの!」  
ネプテューヌ「え、えと…その…」

ネプテューヌはたじたじだ。

ネプテューヌ「ぎ、銀さん…だよ／＼／＼」  
士郎、恭也「なにっ!」  
桃子「あら」

真っ赤な顔でネプテューヌはいい、士郎と恭也は反応し、桃子は小悪魔のような顔をする。

銀時「おいネプテューヌ、こんなところにいたのか?」

知ってか知らずか絶妙なタイミングで銀時が現れた。

恭也「おい」

銀時「え？なに？」

士郎、恭也「こつちへ来い！うちの道場で説教してやる！」

銀時「なんでだアアアアアアアアアア！！！」

銀時はずるずると引きずられていった。

ネプテューヌ「桃子さん、もしかして面白半分でいつてない？」

桃子「さあ どうでしょう」

桃子の本質がよく分からないネプテューヌであった。

某赤いスーパースターでも翻弄させそうな彼女であった。

ちなみに恭也と勝負にあった銀時は一応勝ちました。

シスコンは負ける運命。

恭也「シスコンいうなアアアアアアアアアアアア！！！」

桃子「うふふ・・・」(後書き)

シスコンめ。

恭也「違つわ・・・」

リル「ばぶ」(前書き)

「(早く大人になりたい)」

リル「ばぶ〜」

みなしゃんこんにちは、ねーていあままのむすめのリルでしゅ。

レーティア「リル〜？元気にしてた？」

リル「ばぶ〜！」

このひとがねーていあままでしゅ。

となりのごついおとこがギルシアパパでしゅ。

ギルシア「今ごついって言われた気がするが…」

レーティア「気のせいよ。さあリルちゃん？ご飯の時間よ〜」

リル「う〜」

ちなみにわたしにこうぶちゅはねーていあままのみるくでしゅ。

あのおじはうまかった。

そののましゅまるきゅうのやわらかさもぴかいちだったでしゅ。

ネプテューヌ「レーティア〜 ご飯の時間だよ〜」

レーティア「ああ、ごめん、今リルのご飯あげてるから後で」

あらわれたのはみためがきのくせしてめがみづらしてるねぶてゅーぬでしゅ。

そのうしろにははくはつぼさばさのあたましたくそおとこがいるつしゅ。

銀時「んなもん後でいいだろ？」

レーティア「だめよ。リルの機嫌を損ねるのは母親として駄目なのよ」

ままはわたしのみかたでしゅ。  
けどばーま、てめえはだめだ！

銀時「そうかよ。ったくホント嫌な奴だな」

ムカツ

いくらわたしののうりよくでひどいめにあったからってちよつじに  
のりすぎでしゅ。

いっばつこらしめるっしゅ！

リル「ばぶっ！」

ドゴスツ！

銀時「あべしっ！？」

ネプテユーン「銀さん！？」

ふははは！さいこきねししゅでぐーぱんちしたでしゅ。  
ざまあみろでしゅ。

もうじこくはよるちかいでしゅ。

レーティア「銀さんったら本当に赤ちゃんに対して冷たいのね」  
ギルシア「そうだな。あいつトラウマもんでもあるのか？」



とらづまはありえないでしゅ。  
きつとわたしのよくなあかちゃんまかされてひどいめにあったとお  
もうでしゅね。

レーティア「そんなことよりギルシア」 またやろつよ！  
ギルシア「・・・たくしょうがねえな」

こうしてはばとままはしゅうにいちどきしあんしるんことがおおいつ  
しゅ。

みているみにもなつてほしいでしゅ。  
とはいってもわるいきはしないっしゅ。

リル「ぶ〜）もうねよ・・・」

わたしのいちにちはおわりでしゅ。  
おやすみ〜。

リル「ばぶ」(後書き)

ひらがなばかりでごめんなさい。

プリア」」どうも」(前書き)

「またプリアです」

「プリア」どうも

「シャル」大変、薬を切らしてしまっただわ

「プリア」痛み止め買ってあげましたよ

「シャル」え？あ、ありがとう

「スバル」アイスが食べなくなっただわ

「プリア」5段フルーツアイスですけど

「スバル」え！？ありがとう！

「レオン」丸太が足りんな

「プリア」用意しますね（バッグから丸太が出る）

「レオン」・・・そのバッグは四次元ポケットか？

「シャル」お腹空いたな

「プリア」食べ物ありますよ？（バッグから大量の食べ物が出る）

「シャル」ありがとう！（っていうかあのバッグでよく入ってたわね

・・・）

「はやて」ここまで便利な子は初めてや

「プリア」当たり前です。備えあれば憂いなしが僕のポリシーですか

ら

今まで準備のよいことにはやてとプリアは話し合う。

はやて「でもさすがに一人で働き過ぎはよくないで？」

プリア「・・・分かりました。親衛隊、前へ！」

プリニー「只今参上ッス！」

プリアの号令にプリニー達が現れる。

プリア「僕はしばらく休むからあとよろしく」

プリニーズ「了解ッス！」

プリニー達は敬礼する。

はやて「やっぱりプリア君は便利やなあ……」

いろんな意味で万能なプリアに感心するはやてであった。

プリア」どうも」(後書き)

ある意味すごい奴だ。

ガレーナ「フフフ・・・」(前書き)

「新たな戦術で挑もうか」





その拳の一つ一つの衝撃が星に影響を及ぼしている。

レオン「楽しいぞ！やはりここまでいくとはな！」

ガレーナ「ああ！余も楽しい！ここまで心踊れるのは主がいてこそだ！」

笑みを絶やさず、激しい拳の打ち合いを続ける。

レオン「余興はここまでだ！最後の力で！」

ガレーナ「よかるう！受けて立つ！」

レオンは青い力を、ガレーナは赤い力を最大限にため、

レオン「獅子王神破！！」

ガレーナ「紅蓮神龍拳！！」

お互いの最終奥義をぶつけ合った。

その頃ミッドで、

ドドドドーーーーー！！

新八「ぶはっちっちっち！（飲んでたお茶を拭きだした）な、何事ですか！？」

はやて「この反応…次元震や！グリフィス！」

グリフィス「はい！管理外世界16 34番からの反応が来ました

！」

次元震が現れた事に戸惑う。

だがみんなが慌てる中でリアス、チフユだけは呆れた顔をしていた。

銀時「？お前らどうしたよ？」

リアス「いや、べつに・・・」

チフユ「その馬鹿地震を起こしたやつらを知ってるんでな」

チフユがいい捨てるのと銀時達は「あ」と顔を合わせていった。

で、一つの星がぶっこわれていて、その星をぶっ壊した張本人達はどうと、

レオン「・・・やり過ぎた・・・」

ガレーナ「アテナスにどやされるな・・・」

その後2人はアテナスにきついお叱り（という名の10億ボルト攻撃）を喰らい、壊れた星は彼女が直しました。

ガレーナ「フフフ・・・」(後書き)

このままいったらスーパーサイヤ人を超えちゃいそう...

サチ」「エ入々・・・」(前書き)

「おほいおほい」

サチコ「エへへ・・・」

機動六課の入り口からある少女が現れた。

サチコ「銀時〜、遊びに来たよ〜」

銀時「ギヤアアアアアアアアアア！！また出やがったアアアアアアアア！！！！」

銀時はサチコから逃げる。

サチコはそれを追いかける。

これは何時ものこと。

ネプテューヌ「いつも来るね〜」

ネプギア「私もう慣れました」

そしていつものように食事するネプ姉妹含む全員。

サチコ「あ、そうそう、みんなにも私のお友達が来てるから」

ネプテューヌ「友達？雪ちゃんたちかな？」

ネプテューヌは軽い気持ちで外を見る。

・・・目から赤い血を流した青白い人たちがいる。

レオン「誰だサイレンのゾンビキャラ連れてこいつて言ったのは？」

サチコ「連れてきたのサチコだよ」

老婆？「サチゴちゃんはげんぎがね？」

サチコ「元気だよ〜」

老人？「ぞうがぞうが」



サチコ「エへへ・・・」(後書き)

サイレンとコワイシャシンをだして見た。

動画でみた程度ですが。

リル「アウ」(前書き)

「(こんな能力もある)」



リル「アウッ」

こんにちは、リルでしゅ。

いまわたしはあるちからにちょうせんしてるでしゅ。

リル「うっ」

ぴかーーーーー!!!

光がはれるとそこには特徴的なくせ毛の生えた紫の髪に紫のワンピースを着た少女だ。

ついに成功です！私は人体成長魔法を習得出来ました！  
なんでこの姿になったって？それは私の挑戦心があるからだよ。

リル「さて、ママ達にも驚かせてみようかな」

スキップしながら部屋を出ようとする。

銀時「おっい、ガキンチョいるか？…ってだれだ？」

リル「げっ！？腐った白ヘアー！」

銀時「オイコラ、誰の頭が腐ってるって？」

なんてこと・・・この姿の初対面があのかソテンパーだとは。  
私個人としてはあのかときなかせた恨みが残ってるもん！

リル「あんたのそのぐしゃぐしゃした頭よおじさん」

銀時「テメーに天然パーマの苦しみが分かるかあああ！！！！しかも

俺はおじさんじゃねえ！！お兄さんと呼べエエ！！」

リル「じゃあ何歳？」

銀時「……………さあ？」

しらねえのかよ！！コイツホント馬鹿か！？

つとそうこうしている間に誰か来た。

フェイト「銀時、なにをそんなに怒鳴ってるの？」

コイツ確かフェイトって言ってたっけ？自称クソパーの妻で…

(ピコン！) いいこと閃いちゃった

リル「きゃー！怖い白いおじさんが私をさらった！(棒読み)」

銀時「おiiiiiiiiiiii！！何言ってるやがんだデメエ！！」

あんたを地獄に陥れるために言ってるんだよ。ホラ、妻さんがお怒りだよ。

フェイト「銀時、なに子供相手に怒鳴ってるの？」

銀時「いや違うんだよ。こいつは……………」

リル「私悪くないよ」(嘘泣き)

フェイト「銀時？お話ししようか？」

フェイトさんはあのもじゃパーをドナドナ連れて行く。

ハッハッハ、ザマアミロ。

レーティア「何かしら騒がしいと思ったらそういつごと…」

声が聞こえたので振り返るとママがいた。

私は思わず胸の中にダイブ。

リル「ママ〜ン・・・」

レーティア「くすぐったいわよリル。やっぱり私の娘ね」

嗚呼、この柔らかさとおい、私は幸せだ。

っていかすでに気づくなんてさすがママだね。

遠くであの男の声が聞こえたけどそんなのキニシナイ。

私はちつと生体変化能力で姿を大人に変えた。

・・・ちつとママより胸が大きい？

レーティア「あら？その姿にもなれるのね。でも少し嫉妬しちゃいそう・・・」

リル「ふふ、ママの方がきれいですよ」

ママと同じ視線でいるのって少しいいかも。でもやっぱり子供形態でいいや。

リル「やっぱりこっちの方がしっくりくるや」

ま、いつでも大人になれるけどね。そんな時ギルシアパパが出てくる。

ギルシア「レーティア、どうし・・・ぬおっ！？なんだこの激萌美少女は！？カメラは何処だ！？」

パパは私の様な子供が大好きだったな。まあしばらくこのままでいよう。

銀時「あゝ、だるダボンベツ!？」

・・・聞きたくない声が聞こえたから思わずサイコパンチで殴っちまった。

あやまれ?だが断る!

さて、次はどんな遊びをしようかな、ウフフフフ・・・。

リル「アウ〜」（後書き）

書いてて何気に恐ろしい…。

ラハール「くそ・・・」(前書き)

「いい加減ムチムチを近づけるな！」

ラハール「くそ……」

俺様はラハール。

どんな悪魔でも一目置く魔王だ。

だが俺様が魔王でもどうも苦手なものがある。

レーティア「ラハール君」

ラハール「うわ！近寄るなムチムチ！」

それはムチムチ女だ。

あんなプルプル揺れる肉の塊なぞ滅せればいいものを…。

レーティア「酷い…私にそんな挨拶するなんて…」

ラハール「ぬぐ……」

少し傷つけたな…。

だが仕方が無かるう。

俺様にとってはトラウマの一つなのだ。（ドラマCD参照）

俺様もいろいろ努力して何とか触る程度になったがやはり苦手意識が出てしまうう。

チフユ「心の傷はそう簡単には治らん。慣れることが大事だからな」

レオン「一理あるな」

ガレーナ「余もじゃ」

タバネ「ラハールちゃん可哀想ですね」

ラハール「……これは俺様をいじめているのか？」

ラハールは眉をひそめる。

この六課やギルドメンバーはほとんど胸が大きいしムチムチだ。  
ラハールにとって地獄場でしかない。

リル「ラハールう」

ラハール「うわ！」

後ろから抱きついたやるは確か悪魔女レイティアの娘のリルだ。  
しかも大人形態だからムチムチだ。

ラハール「だー！！引つ付くな！！」

リル「いやよ。私もつと抱きつきたい」

リルは能力で絞める力をあげる。

グオオ苦しい。た、体力が持たん…。

しかもムチムチが当たっているからなおさらだ。

レイティア「リル、苦しそうだからはなしなさい」

リル「は〜い」

運よくレイティアがはなしてくれた。

しかしダメージもあってか足取りがふらふら。

それに顔も青い。

もう限界かと倒れかかる。

ポニユ

ラハール「ん？」

目の前に柔らかい感触がした。

顔をあげると、黒髪の女性・グレイ・ステインだ。



グレイ「・・・なにをしているの?」

無表情のようだが若干の怒りが込まれているように見える。

ラハール「こ…ここまでか・・・ガクッ」

ラハールは気絶した。

グレイ「なんだよ…」

リル「ラハールは胸のおつきい人が苦手みたいなんだよ」  
グレイ「・・・」

グレイは少し複雑な気持ちになった。

ラハール「くそ・・・」(後書き)

ある程度は克服。しかし苦手意識が出ることは変わりません。

レーティア「守るわ」(前書き)

「私の娘には指一本触れさせない!」

レーティア「守るわ」

リル「ス〜」

レーティア「ウフフ、可愛いわぁ」

リルをだいてミッドチルダを散歩している。

レーティア「ん〜、リルちゃんのお肌すべすべね〜、マシユマロみたいにかわいいかも。チュ」

リルに対してもイチャイチャするレーティア。

対するリルはいやがる様子はない。というかねているだけです。

???「よう姉ちゃん？可愛いねえ、俺らと遊ばないかい？」

とガラスの悪い見た目が不良ですと思わせる男達が囲んでいました。数は6人。

不良「お姉ちゃん子持ちか！？しかも人妻？やべ！俺興奮してきた」  
不良「しかもなんてグラビアアイドル級の体付きなんだ」

不良「ヘッヘッへ、姉ちゃん、大人しく俺らを慕った方が身のためだぜ？」

レーティアを見て興奮する不良とナイフで脅す不良。

本来なら一秒とかわからず片付けられるが、リルがいるのでは手出しができない。

レーティア「・・・分かった、煮るなり焼くなり好きにしなさい」  
不良「っうおし！！それじゃあこっちこいよ」

レーティアは不良に案内された。

レーティア「や、あん、そんなにがつつかないで」

案内され早々不良どもにからつをいじられている（特に胸あたり）。  
リルは一人の不良が持っている。

不良「あゝ、柔らか見え。こんな弾力性のあるおっぱいは初めてだあ  
…」

不良「やっべ俺興奮してきた。アナログスティックもたっちまった  
し」

不良「おま、それ古ーよ」

不良「なににせよ。犯しつくしてやろうかね」

リルが人質として取られているのでは手が出せない。  
なら一人ひとり搾り取って置くべきかと策を練るレーティア。

リル「うあ？」

リルが目を覚ます。

視界には気持ち悪い不良。

リル「あ…あ…あ…」

不良「あ？…つてちよつと待てここで泣くなよ？絶対泣く…」

リル「ビエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエ  
エエエ！…！（超音波）」

不良達「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アア！！！！！」

リルが不良を見て怖かったのか超音波攻撃を出した。

不良達はもだえ苦しみ、リルを抱えていた不良は直撃コースなため  
気絶。

そしてリルの体が光り、大人リルになる。

リル「人の母親を、苛めないで！」

不良×4「グボツ！？」

切れたリルは4人の不良をサイコパンチで気絶させる。  
残った不良は腰を抜かしている。

レーティア「あはは、ありがとうリル」

リル「いいよ。母さんちよっぴりドジる事があるし」

レーティア「殴るわよ？・・・それはともかく」

レーティアの背中から悪魔の羽が出現。

レーティア「私の体で遊んだんだから今度は私達が、食べちゃっわ  
よ？」

不良はそれを聞いて真っ青になる。

前にはレーティア、後ろにはリル。

不良に近づいて、豊満な胸を押し付ける。

レーティア、リル「いただきます」

で…

ギルシア「なにになに？『強姦不良グループ逮捕　そして半ミイラ化のなぞ？』」

ギルシアが新聞を呼んで疑問に思う。

レーティア「怖いわねえ…、でも逮捕されて良かったわ」

ネプテューヌ「でもさあ、こいつらまるでサキュバスにでも襲われたかのようにげっそりしてるよ？なにがあっただらう？」

レーティア「なにが起こったか分からないわね。そうよねリルちゃん」

リル「あ〜う〜」

と何事もなかったかのように平穏なままでいく親娘おやめであった。

レーティア「守るわ」(後書き)

一応リルはレーティアの血が混じってるからね。



アンヘル「ひまだ・・・」(前書き)

「遊び相手はおらぬか？」

アンヘル「ひまだ・・・」

アンヘル「・・・」

カイクの相棒で赤いドラゴン・アンヘルはそわそわしている。  
簡単にいえば暇なのだ。

アンヘル（こつ暇では落ち着かん。適当な奴らに罵らせてやるか）

早速ネプ姉妹が来る。

ネプテューヌ「あ。アンちゃんおっはよ」

アンヘル「煩いぞ紫、それから次にそんな名で呼んだら首から上が  
がっばりなくなること覚悟しておけ」

ネプテューヌ「うわ、なんつう威圧のある脅し文句」

いらつと着たアンヘルが毒舌を言うとネプテューヌは冷や汗を流す。

ネプギア「悪気はない……………と思いますけど」

アンヘル「ふん、この薄紫のように大人しくすれば良いものを」

ネプテューヌ「む、失礼だよ！」

ちなみに紫はネプテューヌ、薄紫はネプギアとなっている（髪の毛  
の色で）。

アンヘル「時に黒とチビ黒はどうしてる？」

ネプギア「ノワールさんとユニちゃんなら2人で競争してるんです。  
ってどうかそのユニちゃんのあだ名変えられませんか？」

アンヘル「断る」

アンヘルは真っ先に拒否。

黒はノワール、チビ黒はユニとなっている。

アンヘル「まあよい、む？カイクメ、また女子どもに囲まれておるわ」

ネプギア「分かるんですか？」

ネプテューヌ「そりゃあがいあいだ相棒しているから心は一心同体なんだよ！」

アンヘル「・・・間違っではおらん」

契約によってパートナーとの状況が読めるのだ。

ネプギア「あ、いけない！今日なのはさんが模擬戦する日でした」

ネプテューヌ「あ、そうだね。じゃあアンヘル、またね」

アンヘル「さっさと行け馬鹿もの」

アンヘルはやはりというべきが毒舌。

その表情は豊かに見える。

アンヘル「話し相手が出来たから落ち着いたわ」

ちよっぴり嬉しいアンヘルであった。

アンヘル「ひまだ・・・」(後書き)

真王「ドラゴンは偉そうので偉そうな種族です」

ラム」「むかつく」「ロム」「・・・」(前書き)

「いやなこと思い出しちゃっわ」

「・・・ブルブル」

ラム「むかつく」「ロム」・・・」

ギルシア「ヴィヴィオたん！これでもかというくらいだいてもいいか！？」

ヴィヴィオ「あ、えっと・・・」

なのは、フェイト、ビビ、ネプテューヌ

「断固阻止！」

ギルシア「チッ」

やはりいつもどおりな風景。

ギルシアがヴィヴィオに手をわきわきさせて、なのは達に威圧で止められた。

ラム「むぐ、あいつ見てるとあの変態を思い出すわ・・・」

ロム「嫌い・・・」

双子はとあるあいつを思い出して言う。

フェイト「変態って？」

ラム「変態は変態だよ！あいつからでつかい癖してあたし達に様なことちやい子供が好きなんだよ！それに、あ、あいつから体舐められた恨みがあったし・・・」

ロム「・・・ブルブル」

ラムとロムは思い出しただけで寒気を感じた。

フェイト「な、なめ！？・・・なんて破廉恥な！？」

ラム「破廉恥デ済むとおもっ!？おかげで心に汚い思い出が出来ち  
やったよ!」

ロム「…もういや…」

はやて「ほほっうっそれは興味深い話やなあ…」

はやては身を乗り出した。

すると保護者のミナがやってくる。

ミナ「二人とも、おふろの時間ですよ」

ラム「わっいおっ風呂っ!」

ロム「ラムちゃん、あらいつこしよ…」

ミナ「フフ、そうですね。では全身に舐めまわすように洗い合いま  
しょう」

ミナとラムとロムはシャワー室へ去っていった。

………ん?

フエイト「あれ?ミナ…さん?あれ例えだよね?」

はやて「なんや?ミナさんってそんな趣味が?」

フエイトとはやてはそう考えるのであった。

ラム「むかつく」「ロム」・・・」(後書き)

ミナ「って実は百合観察者だったり？」

ミナ「違います」 実際凶星



プリニート「プリニーツス」(前書き)

「プリア様について行くッス！」

プリニー「プリニーツス」

プリア「せいれ〜っ！」

プリアが号令をかけるとプリニー達が集まって十行十列に並ぶ。

プリア「敬礼！直れ！礼！」

プリアの指示にプリニー達は従い、みんな一緒にそろって動く。

なのは「プリアくん、何やってるの？」

プリア「プリニー達の朝の号令です」

近くから聞いてたなのはが言っているとプリアは言う。

プリア「僕は一人前のプリニーにさせるため、この1000匹のプリニー達を教育してるんです。それもヴァルバトーゼ様のおかげですけどね」

なのは「ヴァルバトーゼ？確かプリニー教育係の……」

プリア「僕はもともとあそこにプリニーでしたから……」

プリアが言う。

プリア「僕はこうやってプリニー教育係を務めています、ヴィヴィオの護衛をこなすつもりですから」

なのは「嬉しいな〜。プリアくんからそんなことが聞けるなんて……」  
ヴィヴィオ「ホントだね〜」

プリア「うわあっ!!!?ヴィヴィオいつの間に!?!?」

プリアはびっくりして後ずさる。

ヴィヴィオ「ついさっき、えへへ、ヴィヴィオちょっと嬉しいかも  
…／／／／／」

プリア「え、あ、うん、そうだね…／／／／／」

ヴィヴィオとプリアはもじもじと顔を赤くする。

なのはこれを見て脈ありだねこれは…と思った。

ふとプリアは横を見るとニヤニヤと笑うプリニー達。

プリア「ちょ！笑わないでよ！お金あげないから！」

プリニー「うええ！！？そんな理不尽ッス！！」

どっちが理不尽だとツツコミたいプリアだがむきになるのは情けな  
いと思った。

プリア「ごめん、それじゃはい」

プリアはプリニー達に給料を払う。

プリニー達は喜んでもらう。

なのは「プリアくん、将来ヴィヴィオを守る騎士になるかな？」

ヴィヴィオ「そうだと…嬉しいな…／／／／／」

ヴィヴィオはプリアの後姿を見てそう思った。

## プリニート「プリニーツス」(後書き)

プリヴィヴィフラグ作ってみた。

Vividでどんな活躍が…あるのか？

レオン「修行だ」(前書き)

「鍛錬は決して怠るな。・・・と師匠からの教訓だ」

レオン「修行だ」

機動六課訓練場

ガレーナ「いくぞレオン」

レオン「いつでもいい」

そこにはガレーナと目隠しをしたレオン。

すると巨大な丸太が彼女を襲うが、レオンはその場を動かず避ける避ける。

まるで丸太が来る位置を把握してるかのように。

ガレーナも同じことやって2人とも合格している。

レオン「ふう・・・」

額の汗を取るレオン。

そこに銀時、ネプギア、新八、神楽、ネプテューヌが現れる。

銀時「イヤあく、精が出てるねえ」

レオン「フン、これくらいではまだ序の口程度だ」

銀時はニヤニヤ笑うが、レオンは切り捨てるように言う。

レオン「だがこれでまた師匠に一步近づいたのも事実」

ネプギア「師匠？」

ガレーナ「ああ、余とレオンの師だ」

レオンとガレーナに師匠というものがいるとは想像しなかった。

レオン「この強さを持つのも全て我が師匠のおかげだ。今やった気配回避のみならず、100キロ疾走、火山渡り、一七山越え、重りをつけて壁キック、更には命綱なしの度胸試しもやったな」

ガレーナ「ああ、思い出せばいい思い出だの」

新八「何処がいい思い出！？傍から聞いてもただの拷問にしか見えねえよ！！」

銀時「つーかお前らの師匠どんだけ過激！？」

拷問にしか見えない修行に新八と銀時は突っ込む。

レオン「なにを言っておる、上空一万キロの綱渡りでも普通だぞ」

全員（レオン、ガレーナ除く）「あれで普通！？」

こちらと師匠の頭は異常だと思つた銀時達。

レオン「師匠は百戦錬磨の真の最強を誇っていたからな。だから私は闘うのさ」

フツ、とほほ笑むレオン。

ネプテューヌ「ところで、師匠ってどんな人なのかな？」

レオン「ん？ビルを柔道技で倒せる奴だと思え」

全員「それどんな怪物モンスター！！？？」

やはり異常だと突っ込まざるおえなかった。

「……ツクス！」

「どうしたの？」

「いや、何処ぞのバカ者が妾のことをバカにしているとみた」

「あはは……」

とある森の中で女性2人がこんな会話をしていた。



レオン「修行だ」(後書き)

レオン達のあの強さは師匠がいないと…。

ネプテューヌ「新技発動！」（前書き）

「…って何これ？」

ネプテューヌ「新技発動！」

ネプテューヌ「ネプギアネプギアネプギアーーーー！！！」

ネプテューヌがだだだど部屋に入ってきた。  
当然ネプギアも驚く。

ネプギア「ド、どうしたのお姉ちゃん!？」

ネプテューヌ「フフ〜ん、実はね。私達が協力技を披露しようと思  
つてね」

ネプギア「協力技？」

ネプテューヌ「早速みんなを呼んで！」

訓練場

銀時「で?何でこんなことになったんだ?」

なのは「まアまあ新技をつきあうぐらいいいんじゃないの銀さん」

銀時達が集まっている。

ネプテューヌ「でね、アーでこうすれば…」

ネプギア「い、いいのかなあ……」

ネプ姉妹はひそひそと新技案を話し合っている。  
そして準備が整った。

ネプテューヌ「いくよネプギア！」

ネプギア「う、うん！」

ネプ姉妹が右手をあげる。

ネプ姉妹「我答える、古より蘇りし伝説の剣よ！今ここに姿を現せ！」

何か呪文を唱えるとネプ姉妹の前に魔方陣が現れて光が漏れだす。

銀時「こ、これは……」

桂「何と!?!」

はやて「ホンマにできよつたんかいな！」

プリア「まじっすか!?!」

見ている人たちは驚きと関心の声を出す。

そして現れたのは世にも珍しい伝説の剣……  
というよりも白髪グラサンのいかつい顔をした男のような奴だった。

全員「……エエエ……!?!」

近藤「え、え、え……!?!?松平のとつつあん!?!?」

全員揃って啞然とした。

ネプ姉妹でも呆れる始末。

ネプテューヌ（ええ……!?!?なんで!?!?何で剣じゃなくて人おお!?!?）

ネプギア（いや、これ人の姿をした剣だよ……多分）

何が何だか分からないのであたふたし出す姉妹。

ネプ姉妹（ああ、もうどうにでも慣れエエエエエエエ！！！）

ネプ姉妹はやけくそで松平剣を振った。

その途中「ブルルルルルラアアアアアアアア！！！！！！！！！  
！」と声が聞こえたのは気のせいだと思い込んだ。

ドガーーーーー！！

振った先のビルが大爆発を引き起こし、木端微塵に吹き飛んだ。

ネプ姉妹「えゝゝゝゝゝゝ？」

やっぱり姉妹は啞然とするしかなかった。

ネプテューヌとネプギアの協力技、『スーパークリエイトソード』  
を習得した。

ネプテューヌ「新技発動！」（後書き）

原作のネプテューヌMK2でおっさんの剣で振り回すシーンがあった。

「（じじい）かな」

「（お前）（お前）」

リル「うう〜」

リル「う〜ん…」

おはよう…っと言えはいいのかしらね。

私はリル、レーティアママの娘よ。

今大人化してるけど。

リル「う、うう〜ん！まだ少し眠いフア〜」

まだ寝足りない感じである。

レーティア「ふあ〜、リル、おはよ〜」

リル「おはよう……レーティア母さん」

大人化の状態ではママではなく母さんと呼んでます。

見た目は立派なレディなので子供じみた呼び方は駄目ってま…母さんが言ってたしね。

リル「着替えようか、母さん」

レーティア「そうね。早くきないと風邪ひいちゃうもんね〜」

…一応言っておくけど私も母さんも裸なんだよね。

裸じゃないと寝ている感じがしないの。（リアスさんもそんな感じだったかな？）



レーティア「みんなおはよ〜」

リル「おはようございます」

なのは「あ、2人ともおはよう」

新八「おはようございます」

イッセー「よおー!」

レシア「おはようございます」

みんな食堂で朝の挨拶。

だが、

銀時「おう、またお前か」

リル「何? いちや悪いのか? このクソパーマ」

銀時とリルが同時に見るや否や相変わらずこのやりとり。

なのは達は苦笑いを出す、レーティアはニコニコ笑っている。

銀時「大体テメーのおかげで俺酷い目にあいまくりじゃねえか。どうしてくれんだこのヤロー」

リル「それはあんたの自業自得でしょうが。いつまでも引きずってんじゃないよ馬鹿パーマ」

レーティア「はいはい、2人とも止めなさい」

これ以上やると(銀時が)大惨事になりかねないと思ったのかレーティアが止める。

リル「む〜、分かったよ母さん」

銀時「へっ、いい気味「バゴオツ!」「ダバラッ!?!?」

リルはしぶしぶ引き下がるが、銀時はほくそ笑いかけてレーティア

とリルのダブルパンチで沈められた。

レーティア「次私の娘にバカにしたら死ぬことより怖いことを受けるのを覚悟しなさい？」

超黒い笑みで銀時に言うレーティア。

周りの黒いオーラは完全に殺意だ。

なのは達は隅っこでガクガク震えている。

レーティア「さ、一緒にご飯を食べましょ？リル」

リル「うん！」

と子供形態に戻ったリルは可愛さ100%の笑顔でいう。

ビビ「やっぱリルちゃんかわええな〜（\*^ ^\*）」

リル「そうかな？」

ビビ「ええ、そのクソパーマはそこでのたれ死ねばいいのに……」

リル「ホント嫌だね」

ビビと意気投合な意見でいう。

今日も一日平和です。（笑）

銀時「俺は全然平和じゃネエエエエエえ！！」

リル」「うう」「(後書き)

ビビリルの仲もよしかな？

アクターレ「俺様はアクターレ！」（前書き）

「伝説のダークヒーローだ！」

アクターレ「俺様はアクターレ！」

機動六課の前

そこに金髪で稲妻のような紫の眉毛をした白いマントの男がいる。

「???」我々は、幾多の敵を倒して伝説の武人、白夜叉を探しに、  
辺境ミッドチルダにやってきた。しかーし！たどり着いたのはいい  
が！ここは血も涙もない白い魔王が占拠されていたのだ！」

怪しい実況を無理やり入れているように見える。  
するとひらりとよけたかのように動いた。

「???」危ない！見えない光線だ！やはり白い魔王の攻撃はまさに  
「  
ネプテューヌ「違うだろオオオオオオオ！！！」

ドガッ！

「???」ゴフッ！」

実況中にネプテューヌが横やりを入れた。

ネプテューヌ「アクターレ！何かと実況付けて嘘いわないでよ！」  
アクターレ「でも、魔界中で噂になってるんだぞ。大きな閃光で脅  
したり白夜叉つてやつをぼこぼこにしたりつてさ」  
ネプテューヌ「あながち間違つてないけど…」

男・アクターレはあんまり臆せず答える。

ってというか怖いもの知らずかと。

ネプテューヌ「ってというかさー、アクターレくん確かヴァルっちの魔界で大統領やってるんでしょ？いいの？」

アクターレ「あ、その辺は大統領権限使ったから」

アクターレの答えにネプテューヌは頭を抱えた。

ヴァルバトーゼの魔界に魔界大統領と呼ばれるものがあり、魔界の統治者である。

アクターレ「ふっふっふ、やはりヒーローは忘れたところにやってくるものだな」

ネプテューヌ「あ、昔ダークヒーローやってたって言ってたもんね」

アクターレ「フッフ、その通り！まだ俺様のダークヒーロー魂が燃え尽きてはいなかった！来る日もその魂を磨き続け！熱狂のファン達も俺様に支持してくれる！」

若干子供の夢である。

アクターレ「フッフ、今や俺様はライブ一本でこのミッドチルダの住民を俺様色の染まる日は近い」

自画自賛だよと突っ込まないネプテューヌ。

アクターレ「そしてゆくゆくは、あの白い魔王をも超える日も近い！俺様はこのミッドの覇者になれるのだ！」

背景に炎が出るアクターレ。

ネプテューヌ「そう言う人に限って死亡フラグが出るんだよ。ほら」

ネプテューヌは後ろを指差す。

アクターレは振り返ると、

白い魔王なのはがいました。

それもとす黒い頬笑みで。

アクターレ「え？うそ？・・・ギニャアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」

その後、アクターレの姿を見たのは誰もいなかった。（生きてます）

アクターレ「俺様はアクターレ！」（後書き）

やはりアクターレはアホですね



チフユ「まったく・・・」(前書き)

「これだからバカ者どもは・・・」

チフユ「まったく・・・」

バシーン！

イツセー「イツテエー！！！」

はたかれた音とイツセーの悲鳴が聞こえる。

チフユ「能力使いの荒い奴め、それでも男か？」

叩いたのはチフユのようだ。

理由はブレイクターゲットいでイツセーがドジして一つを逃してしまっただけらしい。

イツセー「うう、ごめんなさいでした」

チフユ「普通にいえ」

バシーン！

イツセー「イツテー！！！」

またはたかれた。

リアス「大丈夫イツセー？」

イツセー「な、何とか・・・」

リアスが駆け寄ってくる。

銀時「お前らチフユに頭上がらないんだな」

ネプテューヌ「そんなに強いのかな？」  
タバネ「強いなんてもんじゃないよ？チーちゃんは生前最強を誇る軍人だったんだもん」

見学していた銀時達はそういい、タバネが言う。

なのは「軍人か、確かにチフユさんは凄いね」

スバル「私はそうには見えないけど」

ネプテューヌ「ああいう人に関しては実は何処ぞの鬼教師…」

とスバルとネプテューヌが言った時、

ドドガッ！

スバル、ネプテューヌ「ぎゃあああああああ！！！！」

チフユ「人の文句は感心しないぞ」

聞こえていたらしく、本の角にぶつけられ、悶える2人。

リアス「またチフユバスターの被害者が増えたわ…」

銀時「え？なんて？」

リアス「腑抜けな奴に一撃を与える攻撃よ。黙祷中に叩くあの木板とは大違いよ。それにあれを受け続けた奴らは深いトラウマになるんだから」

銀時「・・・あの双子のことか？」

リアスは御名答と言わんばかりに頷く。

チフユ「腑抜けどもに喝を入れるのだ。それぐらいしなくてどうする？」

チフユが会話に参加してきた。

銀時「イヤそれ喝を入れるっつーか玉砕しているようにしか思えんが…」

リアス「ちなみにバスターを受けた奴らの中に記憶とともに脳震盪を起した奴もいるけど…」

チフユ「気合と根性が悪いのだ」

ばっさり切り捨てるチフユ。

???「ワンワンワン！」

ナリア「わ〜！みんな逃げてえ！！！」

すると球体に目と牙が合つて鎖がある鉄球のような犬・ワンワンが現れてチフユ達を襲いかかってきた。

バシコーン！！

ワンワン「ギャウンッ！！」

だがチフユバスターを一撃もらい、一発で気絶した。

銀時「あ、ホントだ」

なんに対してそう言ったのかは黙秘しておく。

チフユ「全くあのバカ者は…」

呆れんばかりにため息を吐く。



チフユ「まったく・・・」(後書き)

ちなみに持っていた本は『軍勝大全』という分厚い本です。

ヴィータ「あたしは大人だ！」（前書き）

「いつもいつもあたしをバカにしやがって…」

ヴィータ「あたしは大人だ！」

ヴィータ「……良く飽きないなブラン」

ブラン「……（こくっ）」

ヴィータとブランが本屋で立ち読み。

ヴィータ「ま、確かにさわがしい面々から抜け出せて心が少し落ち着くよな」

と言つてページをめくる。

見ている本は『大人の魅力講座』ブランは『我が子のコミュニケーションブック』だ。

???「おいこら手をあげろ！」

客「きゃああああ！強盗よー！！！」

すると五人の強盗グループが現れてて人にナイフを突き付ける。

強盗「俺達が現れたんだ。この後言いたいことは分かるよな？」

店員はびくびくしながらレジから金を出す。

ブランは気にせず本に読み戻す。

そしてヴィータは、

ヴィータ「ちよつと待ったあああ！！！」

強盗「うー！！！」

とび蹴りで強盗一人を下蹴り倒す。



ブランは『騒がしいのは嫌い…』とぬかした。

ヴィータ「運が悪かったな。このあたしに捕まるなんてよお！」

強盗「フン！誰かと思えばガキンチョか！」

強盗「しかも幼女だぜ？」

強盗「俺チビっこ興味ねえよ」

強盗「俺こんなペツタンコはいらね」

ブチイッ！

今何かが切れた音が聞こえた。

ヴィータ「おいテメエら…」

ブラン「今なんつった？」

殺意の波動を出す2人。

だがそれに気付かない強盗団。

強盗「ちびで餓鬼でペタペタなガキンチョって言ったんだよ」

死亡フラグ確定。

ヴィータ「誰がウルトラメガハイパーペツタンコチビナスドチビか  
アアアアアアア！！！！！！！！！！（激怒）」

ブラン「ぶっ殺すぞこの馬鹿共がアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！（激怒）」

強盗「そこまでいってねえエエエエエエエエエ！！！！！！！！！！」

で、

銀時「何何？『ブックオンで強盗団壊滅、倒したのは赤白少女？』」

銀時が新聞を呼んでいる。

絵には壊滅した本屋と強盗団を襲う2つの影が。

ネプテューヌ「多分言ってはならない禁句を言ってやられちゃったんだよね？」

銀時「あゝ、あいつらだな」

なのは「あれ言って切れるのあの2人だもんね」

ビビ「あらまゝ可哀想（同情なし）」

そして壊滅させた本人2人はアイスを食べて上機嫌でした。

ちなみに本屋が壊滅したので機動六課は（お金の）痛手を負ったのは言うまでもない。

ヴェータ「あたしは大人だ！」（後書き）

言うてはならないことを言っちゃだめって事ッスね。

屁怒紹「屁怒紹です」(前書き)

「どうもこんばんわ……………あ、間違えた」

## 屁怒紹「屁怒紹です」

屁怒紹「どうもみなさん、数日ぶりですね、・・・屁怒紹です」

屁怒紹がやってきた。(いきなりかあ!?)

もちろん銀時達はガタガタ震えている。

(約数人は平気らしい。)

銀時「へ、へ、へ、屁怒紹様?ま、まさか今来るとは思いませんでしたよ?」

屁怒紹「あ、すみません、僕ちょっと手渡ししないと落ち着かないってどうか何と云うか…」

はやて「いやいやいや!こっち全然大丈夫ですから!」

銀時とはやては汗だく抱くで遠慮する。

屁怒紹「あ、皆さん初対面ですね。私わけありでこのミッドチルダに来ました、屁怒紹です…」

へドロは普通に挨拶したつもりでも他人から見れば威圧しているようにしか見えない。

レーティア(リアルな鬼がいるんですけど!!?なんか怖すぎ!)

ジャンヌ(リアルで見ると屁怒紹さま怖すぎ!)

イツセー(うわ…俺なんかちびりそう…)

ナリア(死ぬ〜!!私死んじゃう〜!!)

タバネ(怖いやりたい怖いやりたい…(無限ループ))

ヤルオ(ピイイイイ~~~~~!!!!!!《意味不明》)

ルシアス、ルーシア(ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめ

んなさい・・・)

プリア(僕、食べられるの?)

ビビ(リアル屁怒紹様着たーーーーー)(。(。：)(。ー  
ーーーーー!!!!!!)

と上記の人ら以外にもビクビクおびえる人もいれば、全く平気な人もいる。

屁怒紹「あ、そうそう、実は六課に皆様方に僕の花を提供したいのですが、これ」

と屁怒紹が出したのはくねくねとおどっているヤシの木だ。  
ヤシの実に口らしきものがあるが。

銀時「あの、屁怒紹様、これは?」

屁怒紹「ルンバツシーという外来植物だそうです」

するとルンバツシーが銀時に近寄ってきた。

「いつしよにおどらないか?」と言ってる気がする。

銀時「あ、ありがとうございます!」

はやて「ありがたく受け取りましたああ!」

とびくびくしてお礼を言い、屁怒紹は帰りました。

屁怒組「屁怒組です」(後書き)

屁怒組は恐怖キャラとして定着しているようです

ネプテューヌ「不思議だね」(前書き)

「ホントなんだろうこれ？」



ネプテューヌ「不思議だね」

ネプテューヌ「……………」

ネプテューヌはじーっとリリ銀パーティでもらったソウルストーンを眺めている。

銀時「そんなに気になるのか？」

ネプテューヌ「そりゃ綺麗だもん。不思議な力が宿ってるように見えるし……」

ソウルストーンを掲げて眺めるネプテューヌ。

銀時「俺にはただの石ころにしか見えねえけど」

ネプテューヌ「なら銀さんは目が節穴ということだね」

ネプテューヌは毒を吐く。

????『そんなおっさんには無理だと思うな』

銀時「誰がおっさんだ!!俺はまだ若いわ!!……………」  
つて誰?」

謎の声が聞こえたので銀時は怒鳴った後疑問になる。

ネプテューヌ「もしかして…君?」

ネプテューヌは光っているソウルストーンに目をやる。

????『そうだ。まずは俺を出してくれ、リロードだ!』

ネプテューヌ「?リロード」

あまりついていけないようだがソウルストーンから光が出る。  
すると赤い二足歩行のトカゲがマイクを持っているような奴だ。

ネプテューヌ「・・・きみだれ?」

???「ききてえか?聞かせてやるぜ。俺はシャウトモンだ!」

赤とかげ・シャウトモンが言う。

ネプテューヌ「えっと、シャウトモンは何でこの中に?」

シャウトモン「ソウルストーンは魂の宿り場だからな」

ネプギア「宿り場?」

シャウトモン以外首をかしげる。

シャウトモン「そいつは強い魂を持つ者の魂をそこに収めるってことだ。俺もその1人…もとい一匹だ」

シャウトモンの説明を受け納得する。

なのは「ところでこのソウルストーンにはシャウトモンくん一人?」  
シャウトモン「ちげーよ、見た目に反して沢山いるぜ?シロウ、ちよっと顔を出せ」

ピカー

シロウ「何を呼びだすかと思えば、なによつだ」

と赤い服装の銀髪頭の男がシャウトモンに言う。



人だったり、アニメに出たキャラだったり、魔物だったり、ガンダムだったりともういっぱいはいっぱい。

シャウトモン「なんでもいいけど戻せ!!」  
ネプテューヌ「ごめ〜ん！」

ソウルストーン技『シャウトモン』を習得した。

ネプテューヌ「不思議だね〜」（後書き）

ソウルストーン技とはいわば召喚魔法的な奴。

伝説の生物が味方になるやもしれぬ。

レイン「俺は男だ」(前書き)

「絶対女装はいやだからな」

レイン「俺は男だ」

ヤルオ「ねえ」

最初はヤルオの一言から。

ヤルオ「レインってもしかして昔女装したことあった？」

レイン「ブブツ！！？」

レインはそれを聞いて吹いた。

レイン「おい、それ誰から聞いた？」

ヤルオ「君の親友の森羅」

レイン「あいつか…。っーか親友と呼べるのかはおいとくがな」

レインは頭を抱える。

レイン「俺は女装はしないぞ！」

ヤルオ「あ、それ一度あったんだ」

レイン「ぐっ！」

何と洞察力のいいヤルオだろう。

銀時「へへ、理樹だけでなくお前も女装されてるのか」（ニヤニヤ）

桂「是非見者だな（ニヤニヤ）」

ギルシア「どなんだ？（ニヤニヤ）」

レイン「テメエらそのニヤケ面止める。凄いイライラする」

ニヤニヤと笑う男性陣にいかるレイン。  
どこかで生温かい視線を感じる。

理樹「レイン君」

レイン「理樹か」

レインは理樹と向き合う。

理樹は『諦める』と首を振った。

女装される苦労人の行く末を知っているようだったが。

森羅「というわけでレイン、ちつとこっちこい」

咲夜「大丈夫よ、痛くしないから」

レイン「そう言う問題じゃ、って放せお前ら!! おれは~~~~~  
!!!!!!」

レインは引きずられていった。

理樹は合掌して『ごめんねレイン君』と謝った。

で・・・

森羅「よお、これが女装レイン・レインちゃんだ」

と言って隠していたカーテンを開けると一人の少女が立っていた。

曇り一つ無い絹のような漆黒の長い髪は、腰まで下ろされている。顔には笑顔が浮かびそれが絶やすことなく笑顔だ。身体に纏っているのは純白のドレス。その少女は周りの男共の眼を確実に引いていた。

周りは啞然としていた。

つとと言うか一般職員の方々は鼻血を噴出して悶絶。



レインちゃん「レイでございます。はじめまして」

と天使の笑顔でいうと、

ブバババババババババババ！

この音は鼻血の噴出音。

男性陣のみならず、女性陣まで悶絶。

全員「に、似合いすぎる…」

鼻血を押さえて耐える方々。

女装レインの破壊力はすさまじい。

マリオ「レイン、それ恥ずかしくないのか？」

ヴィヴィオ「お姉ちゃん誰？」

リル「うあ〜？（誰よ？）」

ベール「ありですわ！」

約数名を除けばの話だが。

ベール「よし、というわけで私はレインちゃんを強奪します。答えは聞いておりません」

ネプテューヌ「ブーブー！そうやって独占するつもり！？」

ノワール「そ、そうよ！あ、あ、あなただけの物じゃないわ！」

ブラン「じゃあ間を取って私が…」

3人「させるかああ！！」

4女神組はレインをめぐってあらそい始めた。

そりゃどっからどう見ても美少女にしか見えん。

レインちゃん「駄目よ、仲良くしなさい」

とエンジェルキラスマイルで。

4女神「ブシヤアアアアアアア！」

部屋全体にまで鼻血放出。

ネプギア「うわあああああああ！！！お姉ちゃんすっかりして  
エエエエ！！！」

一時貧血の症状を出されかねない状況だったそうだ。

レイン「俺は男だ」(後書き)

似合いすぎにもほどがある。

ヴァルバトーゼ「イワシだー!」(前書き)

「今日からお前もイワシを食うがいい!」

ヴァルバトーゼ「イワシだ!!」

ヴァルバトーゼ「俺の居ぬ間にすっかり騒がしくなったな？」

ネプテューヌ「あ、ヴァルっち!」

ネプギア「ヴァルバトーゼさん!お久しぶりです!」

ヴァルバトーゼが六課にやってきた。

それを見たネプ姉妹が挨拶。

ヴァルバトーゼ「うむ、ところでネプテューヌ、例のあれだが…」

ネプテューヌ「ごめん切らしてるんだこれ」

ヴァルバトーゼ「・・・」

ヴァルバトーゼが手に取ったのは一匹のイワシ。

切なげに見た後とりあえずいただいた。

統夜「おい、誰と話してるんだネプテューヌ」

アーカード「ん?あの青年は…」

たまたま散歩していた統夜達とアーカードがやってきた。

ネプテューヌ「ああ、今ヴァルっちと話してるとこ」

メアリ「ヴァルっち?つかあんた誰？」

メアリが素っ頓狂なこと言っていると、

フェンリツヒ「おい貴様、閣下に向かってなんだその態度は?敬意を払え敬意を」

メアリ「え、あ、その・・・」

フェンリツヒから毒舌を撃たれてびくびくする。  
とはいってもフェンリツヒから出る殺気に当てられてるのだが。

ネプテューヌ「もく、フェンリツちつたら何でそんなヴァルツちの  
ことになるのいつもピリピリするの!」

フェンリツヒ「貴様らの様な能天気なガキンチョが閣下に近寄らせ  
ないためだ。分かったがクソガキ」

統夜「なんかムカツと来るんだが…」

達哉「安心しろ、俺らもそう思ったから」

ネプテューヌが反抗、だがフェンリツヒは何時も通りに反し、統夜  
たちはいらいらし出す。

アーカード「もしや吸血鬼族の帝王・ヴァルバトーゼではなからう  
な？」

統夜「帝…王…!?!」

ヴァルバトーゼ「む？俺を知っているのか？」

アーカードの一言に統夜は固まり、ヴァルバトーゼは感心する。  
3人の共通点は分かるはず。

アーカード「私も吸血鬼でな。しかも不老不死。故に1京年以上生  
きているからな」

ヴァルバトーゼ「大昔ではないか。だがまあいい、お前達に一つ問  
いたい」

ヴァルバトーゼ「何か言いたすことがあると思いきや、

ヴァルバトーゼ「お前達の食事はイワシか!?!」

心底どうでもいい質問だった。

アーカード、統夜たち「・・・はい？」

ネプテューヌ「あー、ヴァルっちはわけありで人間の血を吸わないようにしてるんだ」

ネプギア「それをイワシで補っておいたらイワシが大好きな吸血鬼になって…」

統夜「イワシ好きな吸血鬼って聞いたことねえよ！！っーか何でイワシ！？」

ネプ姉妹の説明に納得いかない統夜。

ヴァルバトーゼ「どうした？なにをそんなにイラついている？さっ  
てはイワシを食ってないな！？」

相川「イワシ馬鹿に言われたくないわ！！」

メアリ「っていうかイワシばっか食えるかぁ！！」

統夜「ホントありえねえよ」

その後もイワシと吸血鬼トークは続いた。

余談だがヴァルバトーゼの教えでイワシをカリカリ食べるアーカードを見たとか見なかったとか。

ヴァルバトーゼ「イワシだー!!」(後書き)

イワシは栄養分高いと本人が言っていました。



「……」（前書）

「はるか……／＼／＼／」



以前とあるダンジョンでスライヌラツシュを浴びた事を思い出しているネプギア。

しかしそれは予想どおりだったりする。

ヨポヨポヨポヨポヨ！

ネプテューヌ「うわこっち着たあああ！！！」

スライム集団がネプテューヌ達に襲いかかってきた。体に張り付いて悪さをしている。

スカートの中に入ったり、ベツチャリ張り付いたり、

ビビ「うひゃあ！何処触ってるのよ！！！」

なのは「にゃあああ！！そこはいらないでえ！！！」

スバル「ちよつと！ズボンとらないで！！！」

ネプテューヌ「わーん！パンツ破れちゃう！！！」

ネプギア「く、くすぐりたいですよーめーて！！！」

ベール「ド、何処からはいるうとしていいるのですか！？？」

レーティア「やゝん、体があちこち触られてる！！！」

リアス「く、失態だわ……」

タバネ「やゝん、誰かとつて！！！」

アーカード「チツ、数が多いな。ってどこから入りこもつとしてる！！！」

アリス「チツ、私というものが……」

メアリ「にゃあああああ！！！！やめて！！！！」

レイヴィス「ひいひい！そこからはいるなあ！！！」

大苦戦である。（特に女性陣が）

「ビビ」・・・だぁ〜！もうめんどくさい！皆殺しにしてやる  
！」

我慢できなかった人もいるようで、スライム達は皆御用となりました。

「レーティア」もっとやられたかったな……」

ただ満足できなかった人もいるが。

ピロ「・・・」(後書き)

スラッス。スライムなだけに…

アーカード「ふう・・・」(前書き)

「妙に視線を感じるな・・・」

アーカード「ふう……」

アーカード「……………」

アーカードは今気分がすぐれない。

理由はあちらこちらに視線を感じるからだ。

ネプテューヌ「アーちゃん此処にいたんだ」

アーカード「スマンがそのアーちゃんは止めてくれ。なんか歯がゆい」

とやってきたネプテューヌの一言に突っ込むアーカード。

アーちゃんとはアーカードにあだ名（命名タバネ）。

ネプテューヌ「どうしたの？」

アーカード「このところやたらと視線が絶えんのだ」

ネプテューヌ「そりゃアーちゃん結構美人だもん。その髪にしても胸にしても服装にしても」

ネプテューヌの指摘したようにアーカードは確かに地面を引き摺るぐらいの髪の長さで「か」あたりあるバスト、上半身を露出した服装なのだから目立って当然だ。

アーカード「むう、視線が多いとうっとおしくてかなわん。何かないのか？」

ジャンヌ「なんか呼ばれた気がしたので来ました！」

呼ばれてはないがジャンヌが来た。

ネプテューヌ「(キラン!) ジャンヌちゃんちょっといいかな?」  
ジャンヌ「ん?なに?」  
アーカード「?」

で・・・

アーカード「何だこれは?」  
ジャンヌ「学生服だけど?」  
アーカード「そうではない!なぜ私がこんな恰好をしなければいけないのだ!?」

アーカードはジャンヌによって着せ替え人形にされていた。  
今の恰好は学先生服(しかもアーカードにジャストサイズ)。

ジャンヌ「コスプレすれば目立ちにくくなるんじゃないかな?」  
アーカード「そっちの方が余計目立つぞ!」  
ジャンヌ「はいはい、んじゃこれとこれとこうして...これでいい?」

ジャンヌのお勧めによりアーカードはポニーテールに結んでジツパ  
ー付きの服(胸がでかいたため開いている)に真っ黒なジーパンを身  
につけている。  
周りから見ればかつこいいお姉さんみたいである。



アーカード「まあ、こっちの方が幾分かましだな」  
ジャンヌ「喜んでもらえて何より」

アーカード「さて、銀次は何処にいるのやら……」

アーカードは銀次を探しにそのままの格好で。  
ジャンヌは後を追った。

結論から言うと目立ちにくくなった。

ラフな格好はあまり視線に來ないらしい。

それでも視線はあるものの、普段着よりも少ないことは確かだ。

それから、

アーカード「うむ、やはり銀次を抱くと落ち着く」

銀次「僕は落ち着けませエエエエエエん……！」

銀次捕獲率が上がった。(笑)

後日、彼女は「着慣れんのはどうもな……」といつもの普段着に戻った。

ただ使っていたあの服は閉まってあつたりする。

アーカード」ふう・・・」（後書き）

ジャンヌ「服装変えたら目立つか目立たないか分けられるね」

「べ」「もつなにも恐れない!」(前書き)

「未来は私の物だ!」

「ビビ」もつなにも恐れない!」

とある森

ネプギア「つ、強い……」

なのは「く……このままじゃ……」

モンスター「グルルルルルル……」

とある任務でなのはとネプギアが追い詰められている。  
すると、

ビビ「吹っ飛べエエ!」

ドゴガツ!」

モンスター「グオオオオオ!」

後から来たビビの拳がモンスターをぶっ飛ばした。

なのは「ビビちゃん!」

ネプギア「ビビさん! 助かりました!」

ビビ「どうってことないよ!……こりゃひどいねえ……」

ビビが見ているのはほとんどやられた仲間達。

ネプギア「ごめんなさい、今の私達では足手まといですが、ビビさんだけが頼りなんです!」

なのは「出来るのはビビちゃんだけしかないの! だから頑張ってる!」

ビビ「任せて！こんな奴私がばっばとやっつけちゃうんだから！」  
とってビビはベアトリスとワルギリアを展開。  
心なしか動きがいい。

ビビ「体が軽い…まるで解放された気分…もう何も怖くない！この  
先の未来は、私が作る！」

・・・死亡フラグ確定。

ビビ「とどめだあああああああ！！！」

モンスター「ぎゃあああああああああ！！！」

モンスターは打倒された。

ビビ「どあ？これが私の力…」

ネプギア「ビビさん後ろ！」

ビビ「え？」

ガジッ、ボリッ、ガブッ、ギジャッ、ゴリッ、ゴクッ。

ビビ「ハッ！？夢か！（。A。；）」

まさかの夢オチでした。

「ビビ」どうせならなのはちゃんとイチャイチャしたかったな〜」

そんな願望を漏らすのであった。

「べ」「まじなにも恐れない!」(後書き)

まどムギネタ。

ちっと面白かったんで。

ヴィーター「ゲッ!?」  
(前書き)

「スッゲー嫌な奴が…」



ヴィータ「ゲッ!？」

どこかの廃墟

ヴィータ「ん?何処だここは?あたし確か仕事の疲れで寝てたはず  
…」

そこにポツンとヴィータがたっている。

???「アククククク、お仕事する幼女も可愛いのおく」  
ヴィータ「誰が幼女だゴルア!!!っーか誰だ!!!」

変な声に怒鳴るヴィータ。

その声の主は黄色くて竜の様な頭と背中にリングっぽいのがあって  
ぽっちやり体型の巨大な生物だった。

トリック「わしはトリック・ザ・ハード幼女愛用家である」  
ヴィータ「あたしは大人だ!!!」  
トリック「アクククク!そう見えっぱるな。君はいい幼女だ」

ヴィータの話を全く聞いちゃいない。  
それどころか口から白い息が見える気がする。  
ふとトリック・ザ・ハードの手がヴィータに伸びている。

ヴィータ「おい、その手はなんだ?」  
トリック「アククク!決まってるじゃないか」

ヴィータを捕まえて、



ヴィータ「あ、あんな変態二度と会うか！！！！」

真っ赤な顔でそう誓ったヴィータであった。

余談だがヴィヴィオもヴィータと同じ夢を見たらしく、トラウマで泣き続けたと言う。

ヴィータ「ゲッ!？」 (後書き)

アンチハードのトリックの登場でした。

パンプキン」ハロウィンー！」（前書き）

「お菓子くれないといたずらしてやるー！」

パンプキン「ハロウィン〜ン！」

10月30日。

お菓子とカボチャと夜の祭り、ハロウィンの日。

サチコ「トリックオアトリート」

いつものように銀時を驚かすサチコ達。

もちろん特殊メイク付きで。

銀時「ぎゃあああああああああああああああ……！」

銀時は相変わらず逃げる。

その後追いかけるサチコ達。

ネプギア「似合ってるかな？」

ネプテューヌ「似合ってるって！私が保証するから！」

と悪魔っ子姿のネプギアが戸惑っていて、狼男姿のネプテューヌはなだめる。

ちなみにノワールとユニは吸血鬼、ブラン、ロム、ラムはホワイトウルフ、ベールはウィッチだ。

ベール「はやてさん、似合いますから堂々としてくださいな」

はやて「そうしたいんやけどどうも悪意を感じられるんは気のせいかな？（怒）」

となぜかハロウィンとはあまりなじみのない狸スーツのはやてが言

う。

ちなみに推薦させたのはベール。

ビビ「わあ、やっぱりなのはちゃん似合ってる」

ヤルオ「仮にもあの桃子さんの末っ子だからね…」

ヴィヴィオ「ママ、似合ってるよ」

なのは「にやはは、ありがとう／＼／＼／＼」

フェイト「妙にしっくりくるねこの衣装」

プリンセス姿のビビとヴィヴィオとフランケンシュタインのヤルオ。

そして魔女っ子スーツのなのはとフェイトがいる。

だが2人の着ている衣装は少しかり露出が高い。

黒ブーツ、黒マント、魔女の帽子はいいが問題はメインの服が水着ということ。

これで行ったら人は別の意味で驚く。

ちなみに推薦ははやて。

ムッツリーニ「・・・グフ」

明久「ムッツリーニイイイイイイイイ！！！！」

いつものパターンである死神スーツのムッツリーニと狼男の明久。

神楽「オラ、さつさとよこすアル」(マミー)

エリオ「神楽さん、それじゃカツアゲですよ」(騎士)

神楽「ハロウィンでお菓子貰うならカツアゲするアル」

キャロ「そう言う問題ですか!？」(ワーキャット)

レーティア「はいはい、まだいっぱいあるから順番にね」(サキユバス)

ギルシア「夜は気をつけるよ?誰かに襲われるかもな」(ヴァンパイア)

ヴィータ「そりゃテメーだろ！」（子鬼）  
恭介「盛り上げていこうぜ！イヤツホオオオイ！！」（吸血鬼）  
理樹「イヤ盛り上がりすぎ！」（ウルフ）  
鈴「バカ兄貴め！」（ワーキャット）  
レオン「シャルはきないのか？」（ワーキャット）  
シャル「そのままでもいいわ」（装備なし）  
タバネ「みんなのってるか〜い？」（なぜかバニースーツ）  
カイク「何つうかつこうしてんだ！！」（騎士）  
レシア「それ以前にハロウィン関係ありませんね」（魔女）  
アリエス「ハア〜、ネプテューヌさんも素敵！」（ミイラ）  
ヒメラ「あ、アリエスちゃん！」（魔女）  
リル「だうだう」（装備なし）  
プリア「凄いですねえ！」（装備なし）  
神「ハツハツハ！ようにあつとるのお〜」（装備なし）  
レヴェツカ「オヤジ臭いであんた」（吸血鬼（露出あり））  
仁哉「ウオオオオオオオオ！！」（フレイムマン）  
カイン「熱く燃えるうウウウウ！！」（こちらも）  
竜虎「2人ともあつくるしいのは止めて！」（狼男）  
ハジメ「は、ハロウィン？…一体何なのだ？」（装備なし）  
天音「グレイお姉様〜？」（サキュバス）  
レイン「何だかな…」（吸血鬼）  
森羅「そうか？俺は楽しいぜ？」（フランケン）  
咲夜「楽し〜ね〜ユー君？」（魔女っ子）  
ユーノ「は…はい」（ワーウルフ）  
セレナ「ルンタッタ〜」（魔女）  
マリオ「何しようかな」（装備なし）  
ルイーダ「見えずらいよ…」（かぼちゃと黒マント）  
アーカード「何処にいるのだ銀次は？」（サキュバス）  
冥王「なのはちゃん似合ってるの〜」（魔女）  
ソラ「似合うのか？」（吸血鬼）



アリス「似合ってるぞソラ」(吸血鬼)  
アリア「にゃあ・・・」(ワーキャット)  
統夜「この衣装はじっくりくるな」(ヴァンパイア)  
相川「真祖の吸血鬼だもんね」(キョンシー)  
メアリ「ルシファーでもあるけど」(フェンリル)  
ドーン「我はこのままである」(ドクター)  
レイヴィス「懐かしーな」(ヴァンパイア)  
ベアトリス「魔界にもあるんだ」(エンジェル)  
龍華「お父様、私もやりたいです！」(装備なし)  
イシユタル「ハロウィンか、よく部下どもが私の衣装を気にしてたの」(魔女)

みんな楽しそうである。

TRICK OR TREAT

パンプキン「ハロウィン〜ン！」（後書き）

というわけでハロウィンでした。

カービィ「パワーアップ!」 (前書き)

「僕の能力が進化したよ!」

カービィ「パワーアップ!!」

カービィ「みんな聞いてほしいことがあるんだ」

突然のカービィの宣言。

マリオ「どうした？」

カービィ「僕的能力がパワーアップする話なんだけど……」  
ルイーザ「まじで？」

ネプテューヌ「どんなのか見せてくれない？」

カービィは分かったと言って訓練場へ出た。

カービィ「いくよ」

というと目の前にワドルドゥが現れた。

が、そのワドルドゥはなんだか不思議なオーラを感じる。

そのワドルドゥを吸い込み、コピーするとビームカービィ………  
のように見えるがビームカービィよりももっと強力的な雰囲気  
を放つビームカービィだった。

ネプテューヌ「あれ？ビームカービィじゃない？」

カービィ「これがミラクルビーム。スーパー能力！」

そう言ううと巨大なビーム玉を出す。

それを操るとビルなどが壊れていく。

ビビ「スゴッ!？」

カービィ「ほかにもソードのスーパー能力・ウルトラソードとかバ

「トレーニングのスーパー能力・ドラゴストームがあるけどね」  
「ネプテューヌ」  
「いやいやいや、それも凄すぎるって！」

カービィはスーパー能力を習得した。

カービィ「パワーアップ!」(後書き)

Wiiカービィでこんなのがありました。

百華」「ウフフフ・・・」(前書き)

「かわゆいぞ」

百華「ウフフフ・・・」

百華「君可愛いね。デートしてくれないか？」

女性局員「か、可愛いノノノノ」

なのは「おーい、そこ、ナンパは駄目だよ」

百華が女性にナンパ。これは何時も通りの光景。

銀時「あいつあんなことやって恥ずかしくないのか？」

レオン「あいつは生前もともとああいう性格だったのだ」

その光景を眺める銀時の呟きにレオンが答える。

百華「そう言うことだぞ銀髪、後ちよっくら暇だからサブミッションに付き合え」

銀時「いだだだだだだだだ！」

銀時が百華のサブミッションの実験台にされる。これもいつも通り。銀時自身は気付いてないだろうが、彼女の胸が背中にあたっています。  
・・・ラッキースケベめ。

銀時「俺はラッキーじゃねえ！いででででででで！」

百華「ホラホラ、もっとやられたいのか？なんなら顔を胸につずめながらサブミッションでもさせようか？」

全員「え？」

百華「冗談だ」

百華のセリフに全員（特にラバース）反応するが銀時を放す。



ギルシア「いつも通りだな」

百華「そうだな。美少女うはうは出来るのは良いことだ」

ギルシア「その辺は同意するぜ。幼女と美少女をこれでもかというくらい介護してやりたいもんだからな」

百華「そうそう、もしその子らにけがわらしい男共手にわたるなら……フッフッフッフ」

百華の周りに不気味なオーラを感じる。

ニュース『ニュースをお伝えます。今日未明デパートに強盗集団が立てこもりました。強盗団は強盗団は1000万円と車を要求。更に中には人質が捕らわれております』

とテレビにニュースが流されている。

映像にナイフを持った男と、人質になっている年端もいかない美少女が。

ギルシア、百華「許すまじ……」

見た瞬間怒りオーラが展開された。

そして忽然と姿を消した。

おそらくあのデパートへ行ったんだと思う。

銀時達は「あいつら死んだな」と強盗たちに軽く祈った。

ニュース『ニュースをお伝えます。先日のデパート立てこもり事件で謎の2人組の男性と女性が強盗団を半殺しにしたとの事で、管

理局側は軍事協力と断定、この後強盗団は震える体で『ゴメンナサ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサ  
イゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサ  
イ（以下略）』とトラウマを植え付けられているそうです。』

百華「ウフフフ・・・」(後書き)

分かり切ったことですが…

プリア「よし」(前書き)

「だいぶよくなったかな？」

「プリア」よし」

プリア「……………」

プリアはさつきから資料を黙々と見ている。

ネプテューヌ「プリア、何見てるの？」

プリア「魔物資料です」

プリアはやってきたネプテューヌに即答する。

プリア「僕らが出会った魔物にはこうやって書き記すと便利なんですよ。と言っても半分は僕の趣味ですが……」

ネプテューヌ「どんなのが書いてあるの？」

プリア「そうですね、例えばこんな……」

『（鳥女族）』

鳥が義文化したようなモンスターで空から獲物を求めるハンター。漢字では鳥女トウニョと呼ぶ。

地上の敵に対しては絶対に逃がさない特殊能力を持っている。

主なモンスター名

ハーピィ（茶）・オキュペター（緑）・アエロー（黄）・メルキユ  
ーレ（紫）・ブラッククロウ（黒）・ハーピィクイーン（赤）

魔ビリティー

スカイハント：地上移動キャラに対して絶対に命中する。

## 特殊技

三打連空：空から三回ど突きだす・・・シールドだ。  
アイアンウイング：漢字で読むと鋼の翼とも言う。  
マツハストライク：タクシーに使うのは良くないです。  
メテオスロー：隕石の如く飛ばされたら原型が無くなります。

## く魔蛇族く

魔性の魔物と恐れられている蛇女。下半身が蛇で、髪の毛に5つの蛇の頭がある。

異性の者の状態異常が悪くなりやすくなる香りが放っている。

221

## 主なモンスター名

ラミア（赤）・ゴルゴン（茶）・ナーガ（紅）・オロチ（白）・メ  
デューサ（紫）・ラミアクイーン（黒）

## 魔ビリティー

魔性の魅惑：男性キャラ接近時、状態異常がかかりやすくなる。

## 特殊技

毒蛇のキス：普通のキスなのに痺れるくく・・・  
蛇睨み：睨まれたらカツチカチやぞ！  
八又突き：髪の毛をそんな扱いはいけません。  
炎蛇霊動：火傷と恐怖から逃れられないかもね。

〈妖精族〉

悪戯好きなかわいらしい女の子モンスター。魔法は得意だが、考  
えることは苦手の様である。

どんな魔法に対して中和させる力を持っている。

主なモンスター名

フェアリー（紫）・ピクシー（ピンク）・セルラ（青）・シルフ（  
緑）・フリー（赤）・ティターニア（黒）

魔ビリティー

妖精の鱗粉膜：魔法攻撃に対してダメージを半減する。

特殊技

ぶん殴り：只杖で殴るだけ。ええ、それだけ。

パーフェクトアタック：妖精らしからぬ突進攻撃。けど痛い！

ボンバードツカン：失敗すると大爆発が起こるのは当たり前です。

スターダスト：降り注ぐ星礫は危険です。

〈魔女族〉

魔界に住み着いた魔女がモンスター化した姿。

鍛錬のたわものか魔法攻撃が高い。

主なモンスター名

ウィッチレディ（青）・デビルウーマン（黒茶）・デスセイレス（黄）・デビルマジシャン（黒緑）・ヴァンパイアロード（暗紫）・ウィッチクイーン（暗赤）

魔ビリティー

魔力強化：魔法攻撃が通常の2倍になる。

特殊技

メラ：お化け屋敷にぴったりではないのが玉にきず。

パフパフ：女の武器でみんな快樂に落ちます。きもちいい。

メラゾーマ：当たったら火傷じゃ済みません。

イオナズン：爆発要注意！

人魚族

海の世界に住む美しき女性モンスター。そして歌が好きらしい。

補助魔法に関して長けている。

主なモンスター名

マーメイド（水色）・セイレーン（黄）・サーペント（緑）・ローレライ（紫）・ウンディーネ（青）・リヴァイアサン（紅）

魔ビリティー

人魚の聖歌：補助魔法が通常の2倍になる。



### 特殊技

往復ビンタ：ぷっくり晴れたら地味に痛い。

ハウリングボイス：うるさいってレベルじゃねーぞ！

サーフィンウエーブ：流されるだけでは済みません。

ハウリングリサイタル：もはや災害以上の音声です。

### 〈殺人機族〉

別世界の科学者が作り出したといわれる機械モンスター。

ダメージ量によって攻撃力が増す。

### 主なモンスター名

キラーマシン（青）・キラーマシン改（濃い緑）・キラーマシンZ  
（紫）・キラーマシンX（黒）・キラーマシンカイザー（赤）・キ  
ラーマシン（金）

### 魔ビリティー

カウンターパワー：体力が少なくなるにつれ、攻撃力が増す。

### 特殊技

キラーストーム：ロボにはストームが一番！

マヒャド切り：痛いのか冷たいのかどっちかしろ！

キラースター：これを撃ったら悪魔に…なれるのか？

キラースイクロン：細かく千切りです。スツゲエあぶねえし！

〈龍人族〉

人型の龍族で、戦いを好む戦闘民族。  
攻撃回数によって力をあげる。

主なモンスター名

リザードマン（緑）・サラマンダー（赤）・バジリスク（茶）・ド  
ラゴンナイト（青）・リザードロード（紫）・ドラゴンロード（黒）

魔ビリティー

龍人の闘士：攻撃した回数に応じて攻撃力が増す。

特殊技

ドラゴンナックル：竜の腕力舐めんな！  
ドラゴンファイア：ドラゴンお馴染みの技…地味だけど…  
ドラゴンブレイク：地面をがち割れ！…って危ないだろ！  
ドラゴンバースト：龍の怒りはすぐに止まらない！

〈邪鬼族〉

邪龍族と並ぶ巨人族。実は酒が大好き。  
耐え抜くときに大きな攻撃が出せる。

主なモンスター名

タイラント(赤)・トルル(茶)・オーガ(緑)・サイクロプス(青)・ギガース(黒)・トルルキング(紫)

魔ビリティー

鬼神の逆鱗：ダメージ回数に応じて攻撃力が増す。(一度攻撃すると元に戻る)

特殊技

鬼殴り：野球の球扱いです。

鬼殺し：この一撃は危険だ!!!

鬼神破壊：魂と体が分離されてしまいます!

大鬼神撲殺：一振りで星が壊れるうう!!!

〈魔道巨人族〉

古代より生まれし魔道兵器。破壊を好む危険な敵。

技の回数で威力が上昇する。

主なモンスター名

ゴーレム(茶)・アイアンゴーレム(濃い青)・メタルゴーレム(銀)・グランドゴーレム(紫)・マスターゴーレム(赤)・ジエノサイドゴーレム(黒)

魔ビリティー

破壊衝動：特殊技使用回数に着き、能力が上昇する。

### 特殊技

ゴーレムナツクル：一殴りでも十分すぎる破壊力。

クエイクインパクト：これで大地震を起こしかねない！

破壊光線：『バーストストリーム』と呼んじゃ駄目です。

絶対滅殺砲：星ごと破壊する危険あり。』

プリア「他にも『飛龍族』『魔蜘蛛族』『怪人族』『ライダー族』

『殺蜂族』『小悪魔族』とかいろいろいるけどね」

ネプテューヌ「・・・プリアってすごいのかな…？」

ネプテューヌは疑問に思った。

プリア「よし」(後書き)

なんかネタなところが多いモンスターたちの技。

レオン」「キートン」「(前書き)

「話をしよつか」

レオン「チートについて」

ネプギア「そう言えばマリオさんってあらゆるチートをかき消すとか言っていましたね？」

マリオ「ああ、ただしそれと神からもらったものには、だがな」

ネプギア「じゃあそれ以外は効果が無いんですか？」

マリオ「ん〜、そうだな」

ネプギアがチートについてマリオと話し合っている。

レオン「チートについて知りたいのか？」

ネプギア「はい」

レオン「いい機会だ。では説明しよう」

数分後、みんな集まってきた。

レオン「先ずはチートには3種あるが、それらはそれぞれ『授物型』『才能型』『修練型』だ」

ネプテューヌ「はい、才能と修練は何となく分かるけど授物って何？」

レオン「授物型は能力を貰ったという意味だ。主になるのは転生時に神からのおまけ要素という例だ」

ネプテューヌの質問に答えるレオン。

レオン「また、特殊なアイテムを使用してチートになることも授物型と呼称する。そこは覚えておけ」

マリオ「アイテムでか？」

レオン「次に才能型についてだが、もともと自分の身に宿っているチート能力の意味だ。マリオや銀次が持つチート殺しもその一つだ」  
マリオ「生まれつきだからな……」

マリオは自分の能力を見直している。

レオン「最後に修練型だがこれえは人間の領域よりも上に修行をすることで得られる技を持つ者のみが与えられる力だ。これは私、ガレーナ、百華が該当する」

ルイージ「あ、兄さんは修行してるから……」

レオン「マリオは才能型だ」

ルイージ「あ、はい」

レオン「兎に角、チートについては一通り説明したが、何か質問あるか？」

神楽が手をあげた。

神楽「酢昆布作るチートはアルネ？」

転戦者組「それは絶対ない」

息のいい突っ込み。

レオン「まあものづくりにチート使うのもいたりするがな。そう言うのはさすがにないぞ」

神楽は「んだよー」と言っつて座る。

ネプギアが手をあげる。

ネプギア「それじゃあマリオさんは3つのうちどれをかき消せるん



でしょう?」

レオン「授物型は100%当たるな。才能型は怪しいがこれも該当するだろう。あとの修練型だがこれは私にも分からん。修行で得た力をかき消せるかも知らんしな」

質問は終わる。

レオン「まあこれでチートについて理解が出来ただろう。それではな」

チートについての説明は終わった。

レオン「チートについて」(後書き)

皆さんは何型チートですか？

神子「やれやれ」(前書き)

「世話が焼けますね」

神子「やれやれ」

ティアナ「あゝ・・・」

ティアナが肩と腰を痛そうにしている。

スバル「だ、大丈夫ティア？」

ティアナ「これで大丈夫に見えたらあんたの目は腐ってるわ」

スバル「ヒドッ!？」

ネプギア「筋肉痛ですか？」

ティアナはこくりとうなずく。

ティアナ「もうガツチガチに固まっちゃったみたい・・・」

肩を触ってどうしようかと悩んでいると、

神子「それなら私がやりましょうか？」

神子が現れた。

ネプギア「ティアナさんにマッサージですか？」

神子「ええ、ちよつと医療室のベッドで・・・」

で...

神子「では行きます」

神子がマツサージを開始する。

目の前には背中に肌をさらけ出すティアナとそれを見守るスバル達。

神子「セイ！」

ドドドッ！

ティアナ「イツ！？」

まずティアナの両肩と腰に親指で孔をついた。

当然ながら驚くスバル達。

すると、

ティアナ「あれ？痛みが無い？」

筋肉痛が嘘のようにすっぱりなくなった。

神子「痛みを破壊するつばを刺激したのです」

ネプテューヌ「うわ凄…」

百華「それが師匠だ」

理由になってないぞ百華…。

そのご、神子は医学に関しての知識があり、はやて含め筋肉痛を訴える者たちに泌孔について直していったとの事。  
ちなみにそれだけではない。

神子「セイ！」

局員「イテツ！なにしゃが……う、腕が治った！」

腕や足が神経に歪みが出来て動かせない人々を簡単に直すことが出来るそうだ。

神子「だいぶ凝ってるわね。ここか？ここがきもちいいの？」

局員「ああ、そこ、そこ……気持ち……いい……」

中には気持ち良さのあまり悶える人が絶えないとか。

神子「大丈夫よ。永遠の眠りにつけるように、気持ち良くしてあげるから……」

局員「よ、よろしくお……お願いしますウウウウ……！！！！」

最終的には絶叫をあげた後気絶する人も絶えなかった。

余談ではあるが、神子に百合疑惑をもたれるが、本人は全く否定の様子ではなかった。

神子「やれやれ」(後書き)

マッサージマッスーンってやつだ。

カービィ「これ・・・」(前書き)

「種類多くない？」



カービィ「これ・・・」

ネプテューヌ「ねえねエカービィ。他にどんなコピーが出来るか試してみよっか？」

カービィ「え？」

始まりはネプテューヌの一言。

つというわけでカービィは実験をすることに。

まず目の前にはスライム族。

それを吸い込むと、スライムカービィになった。

青くて半透明な姿になっている。

銀時「スライムか」

タバネ「これでスキマとか通れるようになるもんね」

スライムカービィの特徴は壁や地面の隙間などを通れるようである。  
あと体を変幻自在に操れる。

次に現れたのはモスマン。

コピーするとモスマンカービィになる。

カービィ「わあ、飛んでる」

飛行能力で楽しそうに飛ぶカービィ。

銀時「うわっぷー！リンプン飛ばすな！」

蛾はリンプンを持つ虫なので気をつけよう。

続いてはエリンギヤーでエリンギカービィ。

こちらはキノコ胞子で女性を骨抜きに出来る。ただ度が過ぎると死ぬので止めた。

次はオークカービィ（プチオークをコピー）。

棍棒で相手を攻撃できる。

ちなみに豚の鼻はありません。

次は可愛い植物モンスター・アルラウネをコピーしたアルラウネカービィ。

トゲ鳶で相手を攻撃できるようだ。

次がヴァンパイアカービィ（ヴァンパイアをコピー）。マントと牙があり、体から蝙蝠が出せるようになる。

そして極めつけは吸血能力。これで相手の体力を奪うそうだ。

次にサキュバ斯卡ービィ（サキュバスをコピー）。

飛行出来て蝙蝠弾を飛ばす。

生气吸う気はないけどね。

次はデスをコピーしたデスカービィ。

鎌使いなので鎌に関する扱いも長けているようだ。

次はウッドゴーレムカービィ。

強靱なパワーで相手を吹っ飛ばせる。

更には頭の葉っぱで光合成して体力を回復できる。

次はドラゴンカービィ。

火を吐くのは一般的だが、ダメージが多いと火を噴く量が増えるらしい。

次はディフェンドカービー。

騎士っぽい姿で持ち前の盾で防御と攻撃を一緒にできる。

次がウィッチカービー。

魔女の帽子と箒があり、魔法が使える。

以上がカービーのコピーの種類だった。(本当はまだ立候補があるんだけど...)

カービィ「これ・・・」(後書き)

勝手ながらに想像したコピー能力です。

レーティア」・・・」(前書き)

「サイズがきついわ」

レーティア「……」

レーティア「うん……」

レーティアがなにかうねっている。

ギルシア「どうした？」

レーティア「いやね、最近胸がきつくなったのよ」

と胸をムンズつと持ち上げて言うレーティア。

ムツツリーニ、ムツリ「!!、ブバアッ!!（鼻血）」  
明久「ムツツリーニイイイイイイ!!!!!!」

当然耐性のない人はこうなる。

はやて「なんや大きくなったんか？」

レーティア「そりゃ殿方に良く揉まれるか栄養が胸に言ってるからね」

胸のない人が聞けばいらつとくる言葉である。

フェイト「つてことはわたしも……」

なぜかフェイトは胸に視線をやる。

ネプテューヌ「あれ?どうしたの?」

フェイト「へ?い、いや何でもないよ!」

はやて「（キラン）おっぱい大きくなったん気にしてるんか?」

はやてがしてやったりな顔をしている。

フェイト「は、はやて!？」

はやて「もつとうちに揉ませてくれんか?そしたらもつとでっかくなれるで?」

ビビ(おっぱいソムリエなのは予想で来たけどね…)

ネプテューヌ「・・・揉まれるとおっぱいが大きくなるの?」

ネプギア「お姉ちゃん真に受けちゃダメ!」

はやての一言に真っ赤になるフェイト。

苦笑いをするビビと信じかけるネプテューヌ。

レーティア「こっ胸が大きいと肩こりが激しくなるもんね」

百華「私はすでに解消済みだが」

アーカード「それはどういうみだ?」

ベール「私なんてゲームし過ぎて肩を痛めた事がありますわ」

リアス「そりや自業自得でしょ?」

レオン「ならお前らもやってみるか?」

ユウカ「私達はあなた方のような肉体派じゃないわよ」

タバネ「わたしうんどうにがて」

ガレーナ「情けないな」

レシア「あなたが言いますか…」

ポヨポヨ、ブルンブルン、ボヨン!

巨乳組が話す度に胸が大きく揺れているのは何でだろうか…

ネプテューヌ「作者が変態だからじゃないの?」





レーティア「・・・」(後書き)

あなたはボイン派？ナイン派？

ナイトハウス店員「困った…」（前書き）

「商売あがったりだよもう…」

ナイトハウス店員「困った…」

ネプテューヌ「ただいま」

ネプギア「た、ただいま」

はやて「おかえり。どうやった映画は？」

ネプ姉妹が戻ってきた。

なんでもはやてが映画のチケットが余ったのでネプ姉妹に回したのだ。

そして映画に言ってきたところだった。

ネプテューヌ「うん、結構刺激のあった映画だったね」

ネプギア「私には刺激が強すぎるんですが…」

楽しそうなネプテューヌに対しネプギアはおびえている。

なのは「ちなみにどんな映画？」

ネプテューヌ「スプラッターとホラー映画」

なのは「スプラッター！？大丈夫？」

なのは達は驚愕。

銀時は体が小刻みに震えた気がした。

ネプテューヌ「大丈夫大丈夫！どんな殺人鬼だろうがぼこぼこにできるもん！」

ブリニー「そりゃ映画ツスからね…。ちなみにどんな映画だったん  
スか？」

ネプギア「こ、これらを見ました…」

ネプギアはメモを見せた。

- 『殺戮料理人 ジェフ・マードン』
- 『復讐のアップルマン』
- 『人間肥料の農園』
- 『12日の木曜日』
- 『二面人形 ステラ』
- 『ジエノサイド・マート 地獄の調理師』
- 『アップルマンの逆襲』
- 『血染めの手品師 デノフ』
- 『バイオニック・ハザード』
- 『ダリス イン デッド・ドリーム』

銀時「何これ？どれもこれも碌な映画ないじゃん」

メモを覗き込んで呟く銀時。

なのは「アップルマン？どこかで聞いた様な…」  
はやて「知らんのかいなのはちゃん。フルーティーアイランドという遊園地で大量殺戮したリンゴのかぶり物を着た殺人鬼やで？」

なのはがアップルマンという名前に引っかかりを覚えると、はやてが説明する。

桂「知っているのか八神殿」  
はやて「噂なんやけどな。そのアップルマンは元はホームレスの男で殺戮に酔いしれたんやけどあるお化け屋敷で警察官に射殺されたつちゆうはなしや」  
ベール「まあ、なんて怖いものでしょう」

十中八九みんな怖いなと言えるだろう。

統夜「というかその殺人鬼が何で映画に出てくるんだ？」

みんなさあ？と答える。

メアリ「というか、ネプテューヌちゃん一体どんな映画見てきたの？」

ネプギア「『DEATH HOUSE』という映画館の名前です」

銀時「100%怖すぎる映画館だなおい！！」

銀時は叫ぶ。

本当に恐怖系は苦手だから仕方ない。

ネプテューヌ「とりあえずお土産としてジャクソンの仮面持って来たけどね」

と言ってジャクソンの仮面（というかホッケーマスク）を取り出した。

ネプギア「うがああああああ！！！！それを見せないでエエえ！！

殺人衝動がああああ！！チエーンソー握りたいイイイイ！！！！」

銀時「おいしいiiiiiiii！！なんか豹変してるんですけどおおお！！」

ネプテューヌ「しまった！ネプギア！落ち着いて！ジャクソンに対抗してやっちゃったことがあだになっちゃったよオオお！！！！」

土方「お前一体あそこでなにしてきたんだアアアアアア！！！！」

ネプギアが暴走したので止める。

後で聞くと本人達は、殺人鬼達をぼこって来たとか。

あと一つの建物が崩壊していた。  
看板には『DEATH HOUSE』と書かれていた。

ジェフ・マードン「あの小娘・・・何時か覚えてる...」  
アップルマン「復讐してやる...」

キラーパンプキン「というか大丈夫かお前？」

ジャクソン「チェーンソー怖い仮面怖いチェーンソー怖い仮面怖い  
チェーンソー怖い仮面怖いチェーンソー怖い仮面怖いチェーンソー  
怖い仮面怖いチェーンソー怖い仮面怖いチェーンソー怖い仮面怖い  
...」

ステラ「何があったかよくわかんないけどトラウマ出来ちゃってる  
？」

ドリユフ「血肉うう...」

アップルマン「.....」

デノフ「いやはや、あんな過激なお譲さんは初めてだ」

ダルシア「オンナア.....」

ダリス「生きてたら・・・お友達になれたかな？」

と『DEATH HOUSE』の殺人鬼達の談話であった。

ナイトハウス店員「困った…」（後書き）

フリゲイ『DEATHHOUSE』からちょっとね。

ネプテューヌ「これいいね！」（前書き）

「不思議なアイテムだよ」



ネプテューヌ「きれいいね！」

ネプテューヌ「たっだいま〜！」

なのは「お帰り。あれ？ネプちゃんそれ何？」

ネプテューヌが帰ってきたところ、不思議な仮面を持っているのに気がついた。

ネプテューヌ「仮面屋さんから興味があつたから持ってきたの。なんでもかぶると洗脳できるとかだつて」

銀時「それつけて洗脳？無理無理、つーかそんなの信じねー」

ネプテューヌ「む？だつたら本当に洗脳できないかどーうか試してやるもん！」

はやて「何やつてるんや？」

ネプテューヌ「はやてちゃんに洗脳ビーム！」

仮面のことにあまり信じてない一同。

ネプテューヌはやつてきたはやてに洗脳させる（様に見えるやり方でやつている）。

はやては「何やつてるんや？」と怪しい目で見ているが…。

ドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドンドン

何処からか太鼓の音が聞こえる。

良き見ると仮面には目と手がある。

目が波紋のように白黒変わり、仮面から音がなる。  
するとはやては、

はやて「あゝ、なんかやる気でえへんわ〜」

と目がグルグルになってテーブルに着いた。

なのは「えええ！？」

フェイト「ほ、ほんとにできた！？」

ネプテューヌ「わぁ！これすごいよ！」

なのは達は驚き、ネプテューヌは仮面と見つめ合っている。

ドンドゴドンドゴドゴドゴン！ドンドゴドンドゴドゴドゴドゴン！

またも太鼓の音。

仮面は自ら離れ、音を鳴らした。

ネプテューヌ達は洗脳されてしまった。

仮面はほくそ笑う。

銀時「おい」

が、背後に銀時がたっていた。

仮面は驚くがすぐに洗脳の歌を出す。

が、銀時は聞いてなかった。

銀時「元に戻しやがれエエエエエ！！」

仮面は銀時に木刀にぶっ飛ばされました。

ネプテューヌ達が目を覚ました。

なのは「ハッ！？私達何やってたんだっけ？」

ネプテューヌ「あれ？仮面は？」

銀時「あんな仮面持つてくるもんじゃねえよ」



ネプテューヌ「これいいね！」（後書き）

ドンキーコングに出てきたやつスよ。

「真子」……」（前書初）

「……」

貞子「……」

銀時「う……ん……」

銀時はぐっすり眠っている。  
だがすぐ寝苦しくなる。

銀時「はっ!? ……あゝ、いやな夢だな……」

と汗を取る。

すると一人の女性が目に入った。  
見た目20代後半あたりで若干青白い皮膚で髪の毛は顔が覆い隠す位置になっている。

銀時（え? なにこれ? ……!? 金縛り!? うごけね!）

銀時は金縛りにあう。

???「……の……」

銀時（のって何!? 呪いますって言いたい!? 見た目的に呪う気全開だよ! ……つか俺死ぬし!）

銀時はパニック状態。  
そして女性はいった。

???「あの……ここ……何処……ですか……?」  
銀時「……はい?」

まさかの的外れなセリフに啞然とするのだった。

????「粗茶……ですが」

銀時「あ、ああ、ど、どうも……」

銀時はびくびくして粗茶を受け取る。

それとなのは達が部屋の隅っこでガタガタ震えている。

女性の名は貞子というらしい。

リングと知っている転生者（誰だかは不明）だと超危険な怨霊らしい。

だがその怨霊が粗茶を出しているのが不思議だ。

マリオ「で？いつも井戸で待機してて寝てて目を覚ましたらこんなところに？」

貞子「（こくこく）」

統夜「ある意味シュールだな……」

はやて「シュールっちゅーかある意味すごいつちゅーか……」

ネプギア「幽霊と仲良くなる光景は初めてですよ……あ、サチコちゃんたちがいたんだっただ……」

ナリア「だよね……」

周りの人はびくびくしている。

怖がっていない人もいるが……

すると貞子の体がだんだん透けていく様な……

マリオ「む？慣れない環境に体が付いていけなくなってるな……」

メアリ「どういこと？」

マリオ「言わば崩壊、消滅だ」

貞子「！！駄目……まだ……！！」

貞子は焦る。

マリオ「だが救う手立てはありそうだ」

貞子「？」

ネプテューヌ「ソウルストーンの出番だね！」

とネプテューヌはソウルストーンを取り出す。

そして光を放つと貞子が実体化する。

っというか、

貞子「あれ？……何…これ…？」

前髪があいて、顔がすっきりした美女になっている。

ちなみに肌の色がベージュに戻った。

銀時「あんれエエエエエ！！？？」

統夜「ええええええ！！！？？貞子の顔ってあんなだったか！！！？」

メアリ「違うわよ！！！」

リングを知っている人は貞子の顔は醜い姿だと思っていたが、美少女に匹敵するほどになっている。

プリア「あれかな？ソウルストーンの影響か」

フェイト「た、確かにあれならあり得なくもない」

と自分に納得させる。



貞子「……………（じー）」

銀時「え？何見てんの？」

貞子「なんでもない／＼／＼／＼」

銀時「ちよつと待て、なに最後の／＼／＼／＼は？まさかアレか？マジなのか？」

貞子「（コクッ）」

銀時「やっちゃったよ！！やっちゃったよこの子！！」

銀時は頭を抱えて叫んだ。

銀時「俺とゆ・・・スタンドと一緒にいるなんて真つ平ご免だったのー！！」

貞子「逃げる…の？」

ブウウウウウーーン！

何処から取り出したのかチェーンソーを持っている。

銀時「え？あの、貞子さん？貞子様？止めて冗談だからそれをしまつて？な？な？」

貞子「みんな…呪つて…しまえば…いいのに…」

全員「ぎゃあああああああ！！！！」

暴れまわる貞子を止めたのは数時間後だった。

ソウルストーン技『貞子』を習得した。

貞子に『ヤンデレ怨霊』の称号を手に入れた。

貞子「……」(後書き)

ヤンデレ貞子。あれ？シユール過ぎかな？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8198w/>

---

リリカル銀魂 StrikerS ~銀女神鎮魂歌~ショートストーリー

2011年11月10日08時13分発行